

第二部 第一分冊

世界史を具体でつかむ

古代世界を具体でつかむ

構造と固有名詞を結びつける

生産と余剰から、都市・市民共同体・帝国・精神的統合へ。

固有名詞を、世界史の構造を示す証拠として使う。

『世界史を構造で読む』対応教材

第一分冊 全 80 頁

第一分冊 古代世界を具体でつかむ

第一部では、農耕による生産と余剰から、都市・市民共同体・帝国・精神的統合へと、社会を結びつける仕組みの変化を構造として読みました。本分冊では、その構造を固有名詞へ降ろし、各制度・都市・人物・教えが因果のどこに置かれるかを確かめます。

この分冊で育てる答案技能 固有名詞に構造上の役割を与え、基本的な因果と二項比較を組み立てる。

講	主題	中核となる具体	答案化の焦点
第一講	農耕革命	栽培・定住・貯蔵・余剰	生産の変化を統治の条件へつなぐ
第二講	都市国家	神殿・宮殿・文字・法	集中した資源を持続的な統治へ変える
第三講	ポリス	軍事負担・市民資格・合議	参加の条件と排除の境界を比べる
第四講	古代帝国	交通・地方行政・税・編入	征服を広域統治へ変える装置を比べる
第五講	精神的統合	教え・担い手・制度・伝播路	国家内外を結ぶ共通規範を説明する

読み進めるときの軸 共通点を先に見つけ、同じ比較軸で差を示し、最後に地域差・時期差・史料上の限界を残します。名称の多さではなく、役割のつながりを重視します。

目次

区分	内容	頁
分冊導入	古代世界を具体でつかむ	2
使い方	構造と固有名詞を往復する	4
第一講	農耕革命を具体でつかむ	5
第二講	都市国家を具体でつかむ	20
第三講	ポリスと市民共同体を具体でつかむ	35
第四講	古代帝国を具体でつかむ	50
第五講	精神的統合原理を具体でつかむ	65
分冊まとめ	構造と具体の往復	80

五講を貫く構造の流れ

- 生産** 作物・家畜・水・労働を計画し、定住と貯蔵を持続させる。
- 集中** 余剰・人・祭祀・記録が都市へ集まり、統治機構が形を取る。
- 参加** 軍事と経済を担う者が市民資格を得て、合議を政治技術にする。
- 広域化** 交通・行政・財政・法が、異なる地域を反復的に結ぶ。
- 理念** 教え・教育・教団・官僚が、国家を越える連帯と正統性を作る。

この分冊の使い方

段階	すること	読み方・書き方
1	構造を確認する	第一部の一文要約と中心問いを読み、何を説明する講かを定める。
2	時間と地域を置く	同時性・前後関係・距離を見て、後世の完成形を遡らせない。
3	固有名詞へ役割を与える	制度・人物・都市を「何を示す証拠か」まで言い直す。
4	同じ軸で比べる	共通点を置き、主体・制度・地域・時期の差をそろえて書く。
5	答案を段階化する	一文説明から短い説明、統合説明へ具体例を増やす。
6	留保して結ぶ	単線的因果を避け、別経路・排除・史料上の限界を残す。

知識の優先順位

- 【中核】 本文・比較・演習に繰り返し現れ、答案の根拠として使う。
- 【比較】 中核例との差を明らかにする。名称だけを一律に暗記しない。
- 【発展】 境界事例・学説上の留保・後代との接続を補い、論述に厚みを出す。

記述問題の自己採点

- ①指定語句・字数・地域数を満たす ②固有名詞に役割がある ③因果が途中を飛ばしていない ④共通点と差が同じ軸にある ⑤必然化せず留保がある

第二部 第一分冊 | 本制作

第一講 農耕革命を具体でつかむ

作物・定住・余剰を結び、国家形成の条件と地域差を読む

対応	第一部 第 1 章「農耕革命」	構成	15 頁
時間	前 1 万年紀頃～前 2 千年紀頃	地域	西アジア・東アジア・北アフリカ／比較：アメリカ大陸・ニューギニア

第一部の構造一文要約 農耕は余剰を生み、社会階層と国家の原型を形成した。

中心問い 生産様式の変化は社会構造にどんな影響を与えたか。

一 この講のねらい

農耕を一度の発明として覚えるのではなく、西アジア・東アジア・アメリカ大陸・ニューギニアで、異なる作物・家畜・水利用を伴って進んだ長い農耕化の過程として捉えます。さらに、定住・貯蔵・余剰が分業や階層化、統治の条件へどう結びついたかを、地域差を残して答案へ組み立てます。

二 構造の確認

観点	この講で問うこと
栽培・家畜化	野生資源の利用は、どのように計画的な生産へ比重を移したか。
定住・貯蔵	土地・倉庫・播種・収穫をめぐる継続的な権利と責任はどう生まれたか。
余剰・再分配	毎年一定とは限らない余剰を、誰が集め、蓄え、配ったか。
分業・階層化	直接生産に従事しない役割と、富・権威の差はどの条件で広がったか。
統治の条件	共同労働と資源調整は権力集中を促し得たが、なぜ国家を自動的に生まないのか。

この講の前提 「農耕開始＝ただちに定住・余剰・階層・国家」ではありません。狩猟採集との併存、定住の先行、収穫の不安定さ、共同体内の配分など、途中にある選択と地域差を一段ずつ確かめます。

三 時間と地域の見取り図

農耕化は西アジアから一方向に全世界へ広がったものではありません。作物の野生祖先、気候、地形、人々の知識と交流に応じ、複数地域で異なる時期と組合せをとりました。

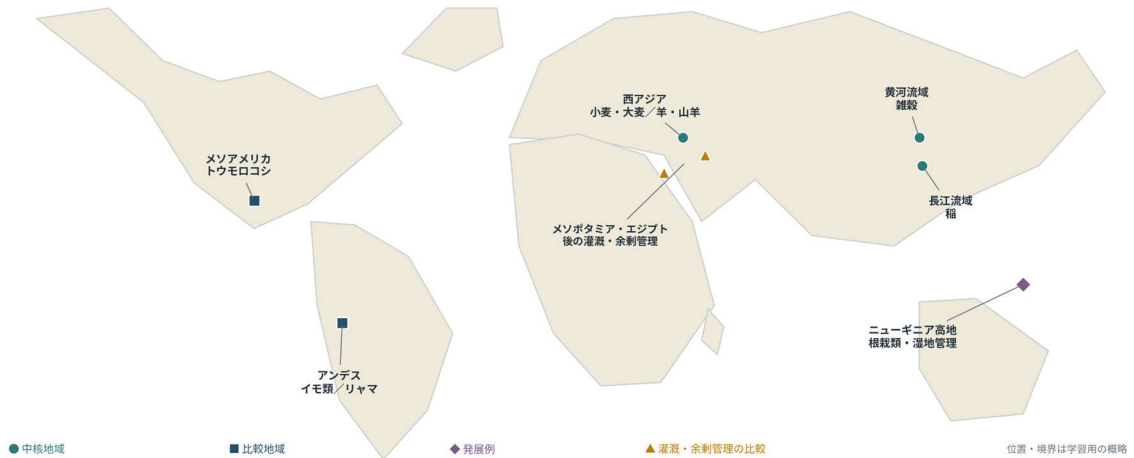


図1 主な農耕化地域と、本講で扱う比較の範囲（位置・境界は学習用の概略）

およその時期	西アジア・北アフリカ	東アジア・その他地域
前 10000 年以前	レヴァントで定住・半定住の採集民社会が開く。	各地で野生植物の集約的利用と環境管理が続く。
前 9000～前 7000 年頃	小麦・大麦の栽培、羊・山羊の家畜化が段階的に進む。	黄河・長江流域でも植物利用と栽培の比重が変化する。
前 7000～前 5000 年頃	村落と貯蔵が拡大し、地域ごとの生産体系が定着する。	黄河の雑穀、長江の稲、ニューギニア高地の土地利用が具体化する。
前 5000～前 2000 年頃	メソポタミア・エジプトで灌漑・余剰管理が大規模化する。	メソアメリカ・アンデスでも作物・家畜の独自の組合せが発達する。

同時性を読む どこか一つの「発祥地」だけを追うのではなく、異なる地域で何が同じ課題となり、何が異なる解決になったかを見ます。

- 「革命」は一瞬の事件ではなく、長期に積み重なった生産と社会関係の転換を指す。
- 作物・家畜・水利用が異なれば、貯蔵・定住・共同労働の形も変わる。
- 初期農耕化と、後の都市・国家成立を同じ時点の出来事として重ねない。

四 具体マッピング

固有名詞を、因果のどこに置き、何を説明する証拠として使うかで結びつけます。

1 選択・技術	2 定住・貯蔵	3 余剰・再分配	4 分業・階層	5 統治の条件
播種・選別・家畜管理 食料獲得を計画化	土地・倉庫・作業暦 集落を長期化	収穫を蓄え、危機時 や祭祀で配る	農耕以外の役割と 富・権威の差	水・労働・紛争を調 整する仕組み

因果の留保 各段階は互いに強め合いますが、すべての地域が同じ順で進むわけではありません。定住が栽培に先行する場合、余剰が共同体で配分される場合、農耕民と牧畜民が分岐・交流する場合があります。

構造・観点	具体例	地域・時期	構造上の意味	答案での役割
栽培・家畜化	小麦・大麦／羊・山羊	西アジア 前 9000～前 7000 年頃	野生資源への依存を減らし、 播種・飼育を継続する。	生産様式転換の具体例
地域別作物	雑穀／稲	黄河・長江流域 前 7000 年頃以降	乾燥地と湿潤地で異なる農耕 体系が育つ。	複数起源と地域差の証拠
定住・貯蔵	レヴァントの集落／貯蔵施設	西アジア 前 10000 年頃以降	土地・倉庫・労働をめぐる継 続的關係を作る。	定住が農耕に先行し得る 留保
灌漑・共同労働	水路・堤・配水／収穫管理	メソポタミア・エジプト 前 5000 年頃以降	調整役と余剰集積を必要とし、 権力集中を促し得る。	国家形成の条件を示す
独自農耕	トウモロコシ／イモ類・リヤマ	メソアメリカ・アンデス	家畜や高度帯の条件が異なる 別経路を示す。	西アジア単一起源論を避ける
湿地管理	クック湿地の盛土・排水	ニューギニア高地	根栽類を中心に土地を長期的 に作り替える。	国家化と別の農耕発展を示す

表の読み方

- 横に読む：一つの具体例を、地域・意味・答案上の役割までつなぐ。
- 縦に読む：異なる地域の作物や水利用を、同じ構造軸で比べる。
- 右端へ戻る：名称を覚えたら、「何の証拠か」を一文で言い直す。

五 地域・国家・事例別に見る ― 西アジア

1 小麦・大麦と羊・山羊 ― 複数の資源を組み合わせる 【中核】

核となる見方 肥沃な三日月地帯では、野生穀物の採集、播種・選別、小麦・大麦の栽培化、羊・山羊の群れ管理が、数世代を越える試行錯誤として進んだ。

何が変わったか 人々は自然にある食料を得るだけでなく、種を残してまき、成長時期を読み、動物の繁殖と移動を管理する比重を高めました。栽培化・家畜化は一度の発明ではなく、人と動植物の関係が長期に変わる過程でした。

なぜ穀物と家畜を組み合わせたか 小麦・大麦は乾燥保存しやすく、翌年の播種や危機への備えに回せます。羊・山羊は肉・乳・皮などを供給し、耕作地だけでは利用しにくい草地も食料へ変えました。組合せは食料の季節差と危険を分散しました。

定住との関係 播種から収穫まで同じ土地へ繰り返し働きかけ、穀物と道具を蓄えるほど、土地・倉庫・家屋へ戻る必要が強まりました。ただしレヴァントでは、野生資源を集約的に利用する定住・半定住の採集民社会が、本格的農耕に先行しました。

社会をどう変えたか 貯蔵は飢えへの備えとなる一方、誰が倉庫を管理し、どの家族がどの土地を使い、収穫や家畜をどう相続するかという継続的な権利関係を生みました。余剰の有無より、その管理と配分の仕方が社会関係を変えます。

答案での使い方 「作物と家畜の組合せ」「計画的生産」「貯蔵と土地利用」を、生産様式の転換から定住・社会関係の変化へ進む因果の証拠として用います。

固有名詞を構造へ戻す

具体例	何を可能にしたか	答案でつなぐ先
小麦・大麦	乾燥貯蔵、播種の再現、食料の季節調整	定住・人口扶養・余剰
羊・山羊	群れの管理、草地利用、食料・素材の多様化	牧畜との分岐・交流
集落・貯蔵施設	土地・倉庫・労働を年ごとに結ぶ	権利関係・再分配・階層化

見落とさない点 農耕化は食料の総量を長期的に増やし得ましたが、初期には作業量の増加、食事の偏り、感染症の広がりも生じました。「農耕＝ただちに暮らしが向上」と評価しません。

五 地域・国家・事例別に見る（東アジア）

2 黄河の雑穀と長江の稲 — 二つの農耕体系を比べる 【中核】

核となる見方 東アジアの農耕化は一つの作物から始まったのではない。比較的乾燥する北方では雑穀、湿潤な南方では稲が重要となり、集落・水利用・家畜との組合せも異なった。

黄河流域 アワ・キビなどの雑穀は、比較的少ない水でも育ち、乾燥した種子を保存できます。畑作、貯蔵穴、豚などの飼育が組み合わせられ、村落を維持する生産体系が発達しました。

長江流域 稲の利用と栽培は湿地・湖沼・河川環境への知識を前提とし、後には水を制御する水田農耕が発達しました。ただし初期から現代の整然とした水田が完成していたと遡及せず、植物利用から栽培・水管理が強まる過程として捉えます。

二体系の接触 北の雑穀と南の稲は孤立したままではなく、地域間交流によって作物・技術が移動し、混合農耕も生まれました。地域の農耕体系は環境だけで決まらず、人々が外来作物を選び、既存の暮らしへ組み込むことで変化しました。

比較軸	黄河流域の雑穀農耕	長江流域の稲作
主要作物	アワ・キビなどの雑穀	稲
水との関係	降水変動に備える畑作・貯蔵	湿地・河川利用から水管理へ
貯蔵	乾燥種子を穴・容器などに蓄える	粃の貯蔵と播種・収穫の調整
集落・労働	畑・貯蔵・家畜を村落で継続管理	水辺の立地と共同的な水利用が重要
答案での役割	乾燥地型の作物選択を示す	湿潤地型の作物・水利用を示す

比較の結論 二地域は作物と水利用が異なりますが、播種・収穫・貯蔵を反復し、土地と集落へ継続的に働きかける点で共通します。相違と共通点を同じ軸で書きます。

環境決定論を避ける 乾燥地だから必ず雑穀、湿潤地だから必ず稲、という一方向の説明にはしません。環境は選択肢と制約を与えますが、技術・交流・社会組織が利用方法を変えます。

五 地域・国家・事例別に見る（灌漑と余剰管理）

3 メソポタミアとエジプト — 水と収穫を社会の仕組みへ変える 【中核】

初期農耕の開始と、前4千年紀以後に都市・王権が発達する過程の間には長い時間があります。ここでは灌漑・共同労働・余剰管理が、国家形成の「条件」をどう広げたかを見ます。

メソポタミア 南部の沖積平野では、河川から水を引く水路、堤、排水の維持が耕作を支えました。上流と下流の配水、土砂の除去、境界争いには継続的な調整が必要で、神殿・有力者・都市共同体などが労働と収穫の集積に関わりました。

エジプト ナイルの季節的氾濫は農耕の周期を作りました。氾濫水を区画へ導き、耕地を測り、労働と収穫を把握する実務は、村落・地域拠点・王権の複数段階で担われました。規則性が一つの統一王権を自動的に生んだわけではありません。

余剰管理 収穫の一部を倉庫へ集めれば、凶作への備え、祭祀、工事、交易、専門職の扶養に回せます。他方、徴収・記録・再分配を担う者は、資源への接近を通じて権威を強め得ます。余剰の量だけでなく、誰が管理するかが重要です。

比較軸	メソポタミア	エジプト
河川・水	流路変化・乾燥に対応する水路と排水	季節的氾濫を区画・耕地へ利用
共同労働	水路清掃・堤・配水調整	区画整備・耕地測量・運搬
余剰の集積	神殿・宮殿・都市の倉庫へつながる	地域拠点・王権の徴収と再分配へつながる
政治的帰結	複数都市が競争し、統合と分立を反復	上・下エジプト統合後に広域王権が発達
留保	灌漑だけで都市国家を説明しない	氾濫の規則性だけで統一を説明しない

因果の置き方 灌漑→共同労働と配水調整→管理役・記録・倉庫の必要→権力集中の可能性、と段階を示します。そのうえで、戦争・交易・祭祀・既存集落の違いが政治形態を分けたと留保します。

次講への橋 余剰・労働・記録が特定の都市へ集まると、統治は一時的な調整から、官僚・文字・法を備える持続的な機構へ変わります。第二講では、その都市国家化を具体で追います。

六 比較して整理する

比較地域	作物・家畜と土地利用	構造上の意味	見落とさない点
メソアメリカ 【比較】	トウモロコシ・豆・カボチャなど。栽培化は長期に進み、大型家畜の比重は小さい。	家畜との組合せが西アジアと異なっても、貯蔵・村落・人口扶養が発達する。	トウモロコシ一つの発明や、外部からの単純伝播としない。
アンデス 【比較】	イモ類・キヌア、リヤマ・アルパカ。高度帯ごとの作物・放牧・交換を組み合わせる。	一つの平野に集中せず、垂直方向の資源差を交通・貯蔵で結ぶ。	高地環境を障害だけでなく、選択された資源配置として読む。
ニューギニア高地 【発展】	クック湿地で根裁類などを利用し、盛土・排水溝で湿地を作り替える。	西アジアと別に農耕が発達し、土地管理が長期化した証拠となる。	独自農耕が直ちに都市・国家へ進むとは限らない。

地域	主要作物・家畜	水・環境への対応	定住・貯蔵	政治的帰結
西アジア	小麦・大麦／羊・山羊	乾燥変動、後に灌漑	村落・穀物貯蔵	後に都市国家へ。直結ではない
黄河流域	雑穀／豚など	比較的乾燥する畑作	村落・貯蔵穴	多様な地域社会が発達
長江流域	稲／豚など	湿地・河川、水管理	水辺集落・粃貯蔵	水田化と政治統合に時期差
メソアメリカ	トウモロコシ・豆・カボチャ	多様な標高・降水	貯蔵・村落	後に都市・国家。大型家畜に依存せず
アンデス	イモ類・キヌア／リヤマ	高度帯を組み合わせる	貯蔵・交換拠点	複雑社会へ別経路で発展
ニューギニア	根裁類など	湿地の盛土・排水	園耕景観を長期管理	早期国家化を伴わない発展

比較の結論 共通するのは、食料獲得を将来へ向けて計画し、土地・労働・貯蔵を継続的に結ぶことです。違いは、作物・家畜・水利用と、余剰を誰がどう管理したかに表れます。

七 答案パーツ

一文説明（50字） 西アジアでは小麦・大麦の栽培と羊・山羊の家畜化が進み、定住と食料貯蔵を支える生産基盤が形づくられた。

短い説明（94字） 西アジアでは小麦・大麦と家畜、黄河流域では雑穀、長江流域では稲が生産の中心となった。作物と水利用の違いに応じて定住や貯蔵の形は異なったが、食料獲得を計画化し人口扶養力を高めた点は共通する。

統合説明（162字） 農耕化は、作物・家畜・水利用の異なる複数地域で進み、定住と貯蔵を通じて食料獲得を計画化した。西アジアの穀物・家畜と東アジアの雑穀・稲は、異なる組合せを示す。余剰は人口と専門的分業を支え、再分配を担う者の影響力を強め、階層化と統治の条件を広げた。ただし狩猟採集との併存は続き、余剰が必ず固定的な階層や国家を生んだわけではない。

問題編 分類から、貯蔵が社会関係を変える因果へ

ミニ演習

問一 具体例を地域と構造へ結びつける

次の事例について、もっとも関係の深い地域を記し、構造上の主な役割を語群から一つ選びなさい。同じ役割を複数回用いてもよい。

語群 作物選択／家畜利用／水管理／高度帯利用／独自農耕の証拠

事例	地域	主な役割
小麦・大麦		
羊・山羊		
雑穀		
稲		
灌漑水路		
トウモロコシ		
イモ類・リャマ		
クック湿地		

問二 貯蔵が社会関係を変える因果を説明する

食料の貯蔵が、土地・労働・再分配をめぐる社会関係をどのように変え得たか、80～100字で説明しなさい。ただし、貯蔵が必ず固定的な階層を生むとは書かないこと。

組み立ての手がかり 蓄えが可能になる→管理・共同作業・配分が継続課題になる→管理者の影響力が強まり得る→地域差を留保する

問題編 同じ比較軸で、西アジアと東アジアを比べる

問三 西アジアと東アジアの農耕化を比べる

西アジアと東アジアの農耕化の共通点と相違点を、作物・家畜、水利用、定住・貯蔵の三軸から110～130字で説明しなさい。小麦・大麦、雑穀、稲の三語を用いること。

比較軸	西アジア	東アジア
作物・家畜		
水利用		
定住・貯蔵		
共通点		
相違点		

比較の順序 相違点を地域別に並べる→同じ軸でそろえる→最後に、計画的生産・定住・貯蔵という共通構造へ戻す。

問題編 条件と決定を分け、灌漑から国家形成までの段階を書く

問四 灌漑と権力集中の関係を、留保付きで説明する

メソポタミアとエジプトに触れ、灌漑・共同労働・余剰管理が権力集中を促し得た理由と、それだけでは政治形態を決定できない理由を 120～140 字で説明しなさい。

設問条件 促した面と、決定しなかった面の双方を書く。河川環境だけを単独原因にしない。

問五 農耕革命を「転換点」と評価する

農耕革命が社会構造の転換点といえる理由を、三地域以上の具体例を用いて 180～220 字で論じなさい。生産様式・余剰・分業・統治の四語を必ず使い、地域差と単線的因果への留保も示すこと。

確認項目	この設問に必要な内容
地域・具体例	西アジア・東アジア・アメリカ大陸・ニューギニアから三地域以上
基本因果	生産様式→定住・貯蔵→余剰→分業・階層→統治の条件
留保	生活改善・階層化・国家形成を自動的結果としない
指定語句	生産様式・余剰・分業・統治

問題編 問五の答案を仕上げる

設問条件を先に分ける

答案の位置	メモする内容
結論	なぜ転換点といえるか
地域例①	作物・家畜・水利用→生産様式
地域例②	別の作物・環境→共通点と差異
地域例③	単一起源を避ける比較例
社会構造	余剰→分業・階層→統治
留保	狩猟採集との併存・生活負担・国家化の時期差
まとめ	長期的・多地域的な転換として評価

最終確認 180～220 字。結論→三地域以上の具体例→社会構造の変化→留保付き評価、の順に通して書く。
指定四語を因果の中で用いる。

解答編 設問間を連続させ、固有名詞の役割まで確認する

九 解答と考え方

問一 解答

事例	地域	主な役割	理由
小麦・大麦	西アジア	作物選択	保存しやすい穀物を栽培し、播種と貯蔵を継続した。
羊・山羊	西アジア	家畜利用	群れを管理し、肉・乳・皮と草地利用を組み合わせた。
雑穀	黄河流域	作物選択	比較的乾燥する環境で畑作・貯蔵を支えた。
稲	長江流域	作物選択	湿地・河川環境の利用と、後の水管理へつながった。
灌漑水路	メソポタミア・エジプト	水管理	配水と共同労働を継続し、収穫管理へ結びつけた。
トウモロコシ	メソアメリカ	独自農耕の証拠	西アジアとは別の作物体系が長期に発達した。
イモ類・リヤマ	アンデス	高度帯利用	異なる標高の作物・放牧・交換を組み合わせた。
クック湿地	ニューギニア高地	独自農耕の証拠	盛土・排水により湿地を長期的に管理した。

考え方 一つの事例が複数の構造を示す場合もあります。ここでは答案へ最初に置く中心的役割を選び、理由欄で他の働きへのつながりを補っています。

問二 解答

模範解答（95字） 貯蔵が広がると、土地や倉庫を誰が管理し、労働をどう集め、収穫を誰へ配るかが問題になった。余剰の再分配を担う者は影響力を得たが、その形は集落ごとに異なり、直ちに固定的支配を生んだわけではない。

別解例（97字） 収穫を蓄える社会では、土地の利用権、共同作業、飢饉時の配分を調整する役割が必要になった。管理者は余剰を動かす力を持ち得たが、共同体の規則や相互扶助が働く場合もあり、貯蔵だけで階層化は決まらない。

★**自己採点の観点** ①土地・労働・再分配から二つ以上を扱ったか。②貯蔵から管理・配分へ因果を進めたか。③階層化を必然とせず、共同体ごとの差を留保したか。

使用した具体例の役割 倉庫と余剰は、物が残ること自体より、管理・配分を継続する役割が生まれる証拠です。

解答編 同じ軸で比べ、条件と結果を分ける

問三 解答

模範解答（117 字） 西アジアでは小麦・大麦の栽培と羊・山羊の家畜化が結びつき、収穫の貯蔵が重要になった。東アジアでは黄河流域の雑穀と長江流域の稲が異なる水環境で発達した。作物構成は違うが、いずれも貯蔵を通じて定住と計画的生産を進め、集落を長く持続させた。

別解例（118 字） 西アジアは穀物栽培と牧畜を組み合わせ、東アジアは北の雑穀と南の稲という複数の農耕体系を育てた。水利用や家畜の比重は異なる一方、収穫の貯蔵と長期的な集落の持続を通じて安定した定住を進め、人口扶養力を高めて社会関係を組み替えた点は共通する。

★自己採点の観点 ①指定三語を正しい地域へ置いたか。②作物・家畜、水利用、定住・貯蔵を同じ軸で比べたか。③相違だけでなく、計画的生産と集落持続の共通点へ戻したか。

使用した具体例の役割 小麦・大麦と羊・山羊は穀物・家畜の組合せ、雑穀と稲は東アジア内部の二体系を示します。

問四 解答

模範解答（129 字） メソポタミアでは水路の開削・維持と収穫管理に継続的な調整が必要で、神殿や有力者への権力集中を促し得た。エジプトでも氾濫水の利用と労働動員が統治と結びついた。ただし水管理は村落や地域でも担え、戦争・交易・祭祀など他の条件なしに国家を自動的に生んだわけではない。

別解例（129 字） 灌漑は共同労働、配水、紛争調整、余剰の集積を必要とし、管理者の権限を強める条件となった。だがメソポタミアの都市分立とエジプトの広域王権が異なるように、河川環境だけでは政治形態を説明できない。既存集落、軍事、交易、正統性との組合せが各地の結果を大きく左右した。

★自己採点の観点 ①共同労働・配水・余剰管理を権力集中へつないだか。②二地域の政治的帰結の差を書いたか。③河川環境を唯一原因とせず、他の条件を示したか。

使用した具体例の役割 水路と氾濫水利用は調整の必要、都市分立と広域王権の差は環境決定論を避ける証拠です。

解答編 複数地域を、留保付きの一つの構造へ戻す

問五 解答

模範解答（198字） 農耕革命は、西アジアの小麦・大麦、黄河の雑穀、長江の稲、メソアメリカのトウモロコシなど、複数地域で異なる過程として進んだ。生産様式の変化は定住・貯蔵と人口増加を支え、余剰の再分配を通じて分業や階層化を促し、統治の条件を広げた。ただし農耕は直ちに生活を改善せず、すべての集落を国家へ導いたわけでもない。地域ごとの作物、水利用、交流、選択の差を伴いながら、社会を長期的に組み替えた点で転換点といえる。

別解例①（200字） 西アジアでは穀物と家畜、東アジアでは雑穀と稲、アンデスではイモ類とリヤマが、それぞれの環境と知識に応じた生産様式を形づくった。計画的生産と貯蔵は人口を支え、余剰を管理する専門職や分業を生み、土地・労働・配分を調整する統治の必要を高めた。一方、狩猟採集との併存は長く続き、階層化や国家形成の時期も一様でない。農耕革命の意義は単一の起源ではなく、異なる地域で社会関係を変える条件が積み重なったことにある。

別解例②（197字） メソアメリカのトウモロコシ農耕、長江流域の稲作、ニューギニア高地の根栽農耕は、西アジアを唯一の起点とする見方を退ける。どの地域でも人々は作物、水、労働を選び直し、生産様式を変えた。人口を支え、労働負担も変えた。蓄積可能な余剰は分業と階層化を促し、灌漑や再分配は統治の役割を広げたが、国家への道筋は地域ごとに異なった。ゆえに農耕革命は一度の発明ではなく、多様な社会変化が長期に重なった転換である。

別解の役割 ①は地域ごとの生産体系を先に比べ、余剰・分業・統治へ進みます。②は西アジア単一起源を退け、人々の選択と国家形成の時期差を前面に出します。

★自己採点の観点 ①三地域以上を扱ったか。②指定四語を因果の中で用いたか。③余剰から分業・階層・統治へ段階を示したか。④生活改善や国家形成を必然とせず、地域差を留保したか。⑤固有名詞の列挙で終わらず、転換点という評価へ戻したか。

使用した具体例の役割 西アジア・黄河・長江は中核的な地域差、メソアメリカ・アンデス・ニューギニアは複数起源と別経路を示す証拠です。

十 この講のまとめ・他講との接続

この講の一文まとめ 農耕化は、複数地域で異なる作物・家畜・水利用を伴って進み、定住・貯蔵・余剰を通じて分業・階層化・統治の条件を広げたが、その結果は一様でも必然でもなかった。

接続する講	この講から持ち越す問い
第二講 都市国家	余剰・労働・記録が都市へ集中すると、調整はどのように官僚・文字・法へ変わるか。
第四講 古代帝国	農耕地帯・徴税・交通は、広域帝国の軍事と財政をどのように支えるか。
第八講 交易ネットワーク	作物・家畜・技術が地域間を移動すると、独自の農耕体系はどう組み替えられるか。
第十六講 産業革命	農耕革命と産業革命は、生産力・人口配置・階級・国家をどう異なる形へ再編したか。
第二十五講 グローバル化	食料生産と地球規模の供給網は、人口・環境・格差をどう結び直しているか。

講末の自己確認

- 農耕化を、一度の発明や一地域からの単純な伝播として説明していない。
- 西アジアの穀物・家畜と、黄河の雑穀・長江の稲を同じ比較軸で説明できる。
- 定住・貯蔵・余剰・再分配・分業・階層・統治の関係を段階的に言える。
- 灌漑が権力集中を促す条件と、政治形態を決定しない留保の双方を書ける。
- メソアメリカ・アンデス・ニューギニアを、複数起源と別経路の証拠にできる。

考えを広げる三つの問い

問いの型	発展問い
比較	農耕民と牧畜民は、土地利用・移動・余剰の形をどのように異ならせたか。
評価	農耕化を、食料総量・栄養・労働・疾病・人口の立場から評価すると、何が両立しにくいか。
長期	初期農耕が作った土地・貯蔵・共同労働の関係は、現代の食料・環境問題へ何を残したか。

発展問い 農耕化は「自然を人間が支配した過程」と言い切れるか。作物・家畜・水・病原体も人間の社会を変えたことを踏まえて考えよう。

第二講 都市国家を具体でつかむ

余剰・記録・権力が都市へ集まり、統治が持続する仕組みを読む

対応	第一部 第 2 章「都市国家の形成」	構成	15 頁
時間	前 4 千年紀～前 2 千年紀	地域	メソポタミア・エジプト／比較：インダス・中国

第一部の構造一文要約 都市国家は余剰管理の必要から統治機構を発展させた。

中心問い なぜ都市は生まれ、どのように国家へと組織化されたのか。

一 この講のねらい

都市を単なる大集落ではなく、周辺農村から集まる余剰、祭祀、行政、軍事、交易を結ぶ統治の結節点として捉えます。文字・度量衡・法は、物事を記す技術であるだけでなく、徴収と配分を反復し、権力の命令と正統性を時間の先へ残す装置でした。

二 構造の確認

観点	この講で問うこと
余剰の集中	周辺農村から集まる穀物・家畜・労働を、誰が保管し配ったか。
統治の拠点	神殿・宮殿・王都は、祭祀と行政をどう結びつけたか。
記録	文字・印章・度量衡は、人・物・命令をどう継続的に把握したか。
軍事・交易	城壁と遠距離交易は、都市を保護と競争の単位へどう変えたか。
正統性	王・祭司・法・儀礼は、資源を集める権力をどう正当化したか。

この講の前提 都市化は一つの河川環境から自動的に生じたものではありません。余剰、人口、交易、戦争、祭祀、地域社会の選択が異なる組合せを取り、都市分立・広域王権・計画都市など別々の政治形態を生みました。

三 時間と地域の見取り図

前 4 千年紀のウルク都市化から、前 2 千年紀の古バビロニア・殷までを同じ幅に置きます。各地域の都市は同時に同じ制度へ進んだのではなく、史料の種類も異なります。



図 1 初期都市文明の主な地域（現代の海岸線を用いた学習用概略図）

地域	前 4 千年紀	前 3 千年紀	前 2 千年紀
メソポタミア	ウルク都市化・初期文字	シュメール都市国家／アッカド	古バビロニア・法典
エジプト	前 3100 年頃に統一へ	古王国・ピラミッド	中王国・新王国へ
インダス	初期ハラッパー文化	前 2600 年頃から成熟都市	前 1900 年頃以後に都市再編
中国	龍山文化などの地域社会	後期新石器・初期国家形成	二里頭・殷／甲骨文字

同時性を読む インダスの成熟都市が栄えた頃、エジプト古王国とメソポタミアの都市国家も存在しました。他方、殷の甲骨文字はより後の時期です。『四大文明が一斉に始まった』とは捉えません。

- 成立時期だけでなく、都市と周辺農村、王権、文字資料の関係を比べる。
- 文字が未解読・未発見の地域では、都市計画から政治制度を断定しない。

四 具体マッピング

固有名詞を『どの統治課題に応じたか』『何を証明できるか』『どこまで言えるか』へ結びつけます。

構造・観点	具体例	構造上の意味	答案での役割
余剰集中	ウルクの神殿・宮殿	穀物・家畜・労働を集め、祭祀と再分配を担う。	都市を管理拠点として示す
記録	粘土板・楔形文字	数量・受け渡し・人名・命令を反復可能にする。	統治の継続性を示す
王権・動員	ファラオ・ピラミッド	地域資源と季節労働を大事業へ組織する。	広域王権の動員力を示す
正統性	ヒエログリフ・王権儀礼	王を神々と秩序へ結び、支配を可視化する。	記録と正統化を結ぶ
標準化	インダスの度量衡・印章	広い都市圏で取引と識別に共通性を与える。	統合の証拠だが王権は断定しない
計画都市	ハラッパー・モヘンジョ＝ダロ	街路・排水・建築規格に共同調整を示す。	行政能力を慎重に推測する
祭祀・軍事	殷の青銅器・王都	王族・氏族・貢納・戦争を祭祀秩序へ結ぶ。	中国の別経路を示す
占いと記録	甲骨文字	王の祭祀・戦争・収穫の問いと結果を刻む。	文字用途の地域差を示す
法	ハンムラビ法典	紛争類型と裁定原理を王の権威で揭示する。	法が秩序を可視化する例

因果の留保 文字は都市国家の成立後に多用途化し、法典も現代の法典と同じ働きをしたわけではありません。制度の名称から、全住民への一様な支配を遡って想定しません。

五 地域・国家・事例別に見る — メソポタミア

1 ウルクとシュメール都市国家 — 余剰を記録へ変える 【中核】

核となる見方 南メソポタミアでは、神殿・宮殿が周辺農村の生産物、労働、祭祀、交易を都市へ結び、記録を通じて管理を継続した。

都市化 前4千年紀後半のウルクでは、人口・専門職・大規模建築が集中しました。都市は農村から切り離された消費地ではなく、農地・牧地・水路・交易路と結びつく地域的な中心でした。

神殿と宮殿 祭祀は共同体の世界観を支え、同時に穀物・家畜・織物・労働を集めて配る実務と結びつきました。後代には王権と宮殿の比重も強まり、祭祀・行政・軍事の中心は重なりながら分化しました。

楔形文字 最初期の粘土板には数量や物資の記録が多く見られます。書記は品目・量・受取人・責任を残し、管理を個人の記憶から組織の記録へ移しました。文字は文学以前に行政実務を支えましたが、その用途は後に広がりました。

都市国家 ウル・ウルク・ラガシュなどはそれぞれ神々・支配者・城壁を持ち、競争と同盟を重ねました。共通文化があっても一つの国家ではなく、都市と周辺農村が政治単位となりました。

具体	解決した課題	答案での役割
神殿・宮殿	集積・祭祀・再分配	余剰が権力へ変わる拠点
粘土板・書記	数量・責任・命令の記録	統治の反復と継続性
城壁・軍隊	保護・水路・土地をめぐる競争	都市が政治単位になる条件

見落とさない点 灌漑がただちに専制王権を生んだとは書きません。水路は共同体でも管理でき、戦争・交易・祭祀・既存の有力者層との組合せが政治形態を左右しました。

五 地域・国家・事例別に見る（エジプト）

2 ファラオとナイル流域 — 地域を広域王権へ結ぶ 【中核】

核となる見方 エジプトでは都市が孤立した国家へ分立し続けるより、上・下エジプトの地域拠点、王権、神殿がナイル流域を広く結ぶ形が強まりました。

統一と地域 前 3100 年頃に統一王権が形成されましたが、地方の州（ノモス）と有力者が消えたわけではありません。王は地方拠点・神殿・官吏を通じて耕地、貢納、労働を把握しました。中央集権は一度完成して不変だったのではなく、統合と分裂を繰り返しました。

ピラミッド 古王国の大規模建設は、石材・食料・舟運・専門職・季節労働を長期間調整する能力を示します。常時大量の奴隷だけで造られたという固定観念を避け、農閑期の労働、徴発、専門集団、給養の組織化を読み取ります。

文字と正統性 ヒエログリフは王名・神々・儀礼を記念碑へ刻み、王を宇宙的秩序と結びつけました。実務ではより筆記に適した書体も使われ、徴税・倉庫・工事の記録と、王権の永続性を示す表現が併存しました。

メソポタミアとの比較 両地域とも余剰・労働・記録を集めました。メソポタミアでは複数都市の競争が続き、エジプトでは広域王権が早く成立しました。河川の規則性や地形は条件の一つであり、戦争・交通・地方社会・王権理念も説明に入れます。

比較軸	メソポタミア	エジプト
政治単位	複数の都市国家が競合	広域王権と地方州
文字の重点	物資管理から多用途化	実務記録と王権表象
大規模動員	水路・城壁・神殿・軍事	建設・耕地把握・舟運

環境決定論を避ける 『ナイルが安定していたから統一、メソポタミアが不安定だから分立』だけでは、制度を作った人々、都市間戦争、地域有力者、交易、王権の正統化を説明できません。

五 地域・国家・事例別に見る（比較地域）

3 インダスと殷 — 異なる史料から都市統治を読む 【比較】

インダス都市文明 — 標準化は見えるが、王の姿は見えにくい

前 2600 年頃からハラッパーやモヘンジョ＝ダロでは、街路、焼成煉瓦、排水施設、貯蔵・作業空間が整えられ、度量衡や印章にも広域的な共通性が見られます。共同調整と交易の存在は示せますが、文字が未解読で、巨大王墓や明瞭な王名資料も乏しいため、メソポタミア型の王権や単一国家をそのまま想定できません。

見える証拠	言えること	まだ断定できないこと
街路・排水・煉瓦規格	長期の計画と共同調整	統一王朝による直接命令
度量衡・印章	取引・識別・広域共通性	行政文書の内容と権力者像
都市間の類似	交流圏または共通規範	全域が一国家だったこと

殷 — 王都・祭祀・軍事を甲骨文字で結ぶ

前 2 千年紀の中国では複数地域の複雑社会が発達し、殷の後期王都・安陽では、宮殿・祭祀遺構、青銅器、武器、墓、甲骨文字が残りました。王は祖先神へ問い、収穫・戦争・狩猟・祭祀を記録し、氏族・貢納・軍事を王権へ結びました。これは都市と文字の別経路を示しますが、後代の統一帝国の官僚制を遡らせません。

史料批判 都市計画、文字、王墓は同じ種類の証拠ではありません。『残っているもの』と『そこから推測する制度』を分けると、固有名詞が断定の飾りではなく、論証の根拠になります。

六 比較して整理する／七 答案パーツ

比較軸	メソポタミア	エジプト	インダス	殷
都市と農村	都市国家と周辺耕地	王権が流域を広域統合	複数の計画都市	王都と地域拠点
統治主体	王・祭司・宮殿	ファラオ・官吏・神殿	明確な王像は不詳	王・氏族・祭祀集団
記録	楔形文字・粘土板	象形文字と実務書体	印章文字は未解読	甲骨文字
標準化	度量衡・文書・法	耕地把握・王権表象	煉瓦・度量衡・印章	青銅器・祭祀規範
政治規模	都市分立と広域統合の往復	早期の広域王権	統一国家かは未確定	地域王権、後代帝国とは別
留保	水利だけで専制を説明しない	地理だけで統一を説明しない	計画都市から王制を断定しない	後代制度を遡らせない

比較の結論 共通するのは、余剰・労働・祭祀・交易を都市へ集め、記録や規格で継続させたことです。違いは、統治主体、都市と農村の結び方、政治規模、史料から確かめられる範囲にあります。

一文説明（43 字） ウルクでは神殿・宮殿が余剰と労働を集め、楔形文字による数量記録を通じて管理を反復した。

短い説明（92 字） 楔形文字は物資・税・労働の受け渡しを残し、個人の記憶を越えて行政を継続させた。ハンムラビ法典は裁定原理を王の言葉として揭示し、記録が管理だけでなく秩序の正統化にも用いられたことを示す。

統合説明（150 字） メソポタミアとエジプトでは余剰・労働・祭祀を集め、文字と官吏で統治を継続した点が共通する。一方、前者では都市国家の競合が続き、後者では広域王権が早く成立した。インダスの計画都市は標準化を示すが、未解読文字のため王権像は断定できない。都市国家形成は一つの環境から同じ政治形態が生まれる過程ではなかった。

問題編 分類から、文字が統治を継続させる因果へ

ミニ演習

問一 具体例を地域と統治課題へ結びつける

次の用語について、最も関係の深い地域・文明を記し、主な役割を語群から一つ選びなさい。

語群 余剰集中／記録／正統化／標準化／祭祀・軍事

用語	地域・文明	主な役割
ウルク		
楔形文字		
ピラミッド		
度量衡・印章		
甲骨文字		
青銅器祭祀		

問二 文字が都市統治を継続させた理由を説明する

楔形文字またはエジプトの文字に触れ、文字が余剰・労働・税・命令の管理に果たした役割を 80～100 字で説明しなさい。文字を単に『便利な伝達手段』とだけ書かないこと。

組み立ての手がかり 数量や責任を記録する→離れた人・後の時点でも確認できる→徴収・配分・命令が反復可能になる

問題編 同じ軸で、メソポタミアとエジプトを比べる

問三 都市分立と広域王権の差を説明する

メソポタミアとエジプトの共通点と相違点を、余剰管理・文字・政治単位の三軸から 110～130 字で説明しなさい。河川環境を唯一の原因にしないこと。

比較軸	メソポタミア	エジプト
余剰管理		
文字		
政治単位		
共通条件		
差を生む他の要因		

比較の順序 共通する管理課題→同じ制度軸での差→地理・戦争・地域社会・正統性の組合せ、の順に書く。

問題編 証拠から言えることと、まだ断定できないことを分ける

問四 インダス都市文明を史料の限界とともに説明する

ハラッパーまたはモヘンジョ＝ダロに触れ、計画都市・度量衡・印章から分かる統合の特徴と、未解読文字のため断定できない点を 120～140 字で説明しなさい。

証拠	そこから言えること	言い過ぎになる推測
街路・排水・煉瓦		
度量衡・印章		
未解読文字		

設問条件 『高度な都市文明だった』で終わらず、共同調整と広域共通性を具体化し、王制・統一国家の断定を留保する。

問題編 農耕革命から都市統治までを、三地域以上で統合する

問五 都市国家成立の歴史的意義を論じる

農耕革命からの連続性を踏まえ、都市が国家形成の具体的な形となった理由を、三地域以上の具体例を用いて 180～220 字で論じなさい。余剰・記録・正統性・統治の四語を必ず使い、政治形態と史料の地域差も示すこと。

答案の位置	メモする内容
結論	都市は何を集中し、何を制度化したか
地域例①	ウルク・楔形文字・都市国家
地域例②	エジプト・王権・大規模動員
地域例③	インダスまたは殷・異なる史料
基本因果	農耕・貯蔵→余剰→専門職・記録→統治
留保	環境決定論・単一経路・史料からの言い過ぎを避ける

最終確認 180～220 字。結論→三地域以上の具体例→共通構造→地域差と史料上の留保、の順に通して書く。

解答編 固有名詞を、統治上の役割へ戻す

九 解答と考え方

問一 解答

用語	地域・文明	主な役割	理由
ウルク	メソポタミア	余剰集中	神殿・宮殿・専門職が都市へ集まる。
楔形文字	メソポタミア	記録	物資・労働・命令を粘土板に残す。
ピラミッド	エジプト	正統化	王権と大規模動員を記念物で示す。
度量衡・印章	インダス	標準化	取引・識別に広域的共通性を与える。
甲骨文字	殷	記録	祭祀・戦争・収穫への王の問いを刻む。
青銅器祭祀	殷	祭祀・軍事	氏族・貢納・王権を儀礼へ結ぶ。

考え方 同じ具体例が複数の働きを持つ場合もあります。ここでは答案の最初に置く主な役割へ分類し、理由欄で他の働きへのつながりを示しました。

問二 解答

模範解答（86 字） 楔形文字は穀物・家畜・労働・税の数量と受け渡しを記録し、後の時点でも責任を確認できるようにした。記憶に頼らず徴収と再分配を反復できるため、都市の統治を組織として継続させた。

別解例（85 字） 文字は物資の量、納入者、配分先、命令を残し、書記や官吏が離れた場所と時点を越えて管理する基盤となった。余剰を集めて配る手続きを持続させ、支配の規則と王の権威も可視化した。

★**自己採点の観点** ①余剰・労働・税・命令から二つ以上を扱ったか。②記録から確認・反復へ因果を進めたか。③文字を統治組織の継続へ結んだか。

使用した具体例の役割 楔形文字は、行政が個人の記憶を越えて継続する証拠です。法・神話・文学への展開は別の役割として加えます。

解答編 同じ軸で比較し、証拠と推測を分ける**問三 解答**

模範解答（119 字） メソポタミアとエジプトでは、余剰と労働を拠点へ集め、文字で徴収・配分を記録した点が共通する。前者では複数の都市国家が競合したが、後者ではファラオの広域王権が形成された。差は河川だけでなく、戦争・交通・地方社会・王権理念の組合せから生じた。

別解例（125 字） 両地域は農村の余剰を都市・神殿へ集め、書記と官吏によって統治を継続した。メソポタミアでは都市ごとの王権が分立し、エジプトでは流域を結ぶ王権が早く成立した。ただし政治単位の違いを汎濫の規則性だけに求めず、都市間競争や地方有力者、正統性も考える必要がある。

★自己採点の観点 ①余剰管理・文字・政治単位を同じ軸で比べたか。②都市分立と広域王権の差を書いたか。③河川環境を唯一原因としなかったか。

問四 解答

模範解答（126 字） ハラッパーやモヘンジョ＝ダロの街路・排水・煉瓦規格は、都市建設を長期に調整する能力を示す。共通の度量衡と印章からは、取引と識別を支える広域的規範も分かる。ただし文字が未解読で王名や行政文書を読めないため、単一王朝や中央集権国家の存在までは断定できない。

別解例（128 字） インダス都市では計画的な街路、排水、標準化された煉瓦が見られ、度量衡と印章も広い範囲で共有された。したがって都市間の交流と共同調整は推測できる。一方、印章文字は未解読で、明瞭な王墓や王名資料も乏しいため、メソポタミアと同じ王権型国家だったとは言い切れない。

★自己採点の観点 ①計画都市と標準化から共同調整を説明したか。②未解読文字を史料上の限界として用いたか。③王制・統一国家を断定しなかったか。

使用した具体例の役割 街路・排水・度量衡は見える統合、未解読文字は政治制度を慎重に扱う根拠です。

解答編 複数地域を、一つの構造と複数の経路へ戻す**問五 解答**

模範解答（200字） 農耕革命による定住と貯蔵は、余剰・人口・専門職を拠点へ集中させた。ウルクでは神殿・宮殿と楔形文字が徴収と再分配を反復し、都市国家の統治を支えた。エジプトではファラオが流域の労働を大規模事業へ動員し、文字と儀礼で正統性を示した。インダスでは計画都市と度量衡が広域的共通性を示すが、未解読文字のため王権像は断定できない。都市は余剰を記録と制度へ変えた点で国家形成を具体化した。政治形態は様でなかった。

別解例①（193字） 農耕が生んだ余剰は、食料を蓄えるだけでなく、管理者・書記・職人・兵士を支えた。メソポタミアの都市では神殿と宮殿が物資を集め、楔形文字で統治を継続した。エジプトでは広域王権が耕地・労働を組織し、ピラミッドと王権表象が正統性を可視化した。殷でも王都・甲骨文字・青銅器祭祀が氏族と軍事を結んだ。ただし都市国家・流域王権・地域王権は別の形であり、自然環境から同じ制度が自動的に生じたのではない。

別解例②（194字） 定住・貯蔵の拡大は余剰と人口を集め、都市を祭祀・交易・防衛・統治の中心にした。ウルクの粘土板は物資と労働を記録し、エジプトの文字と記念建築は王の正統性を支えた。ハラッパーとモヘンジョ＝ダロでは街路・排水・度量衡の標準化が見えるが、未解読文字のため単一王朝は断定できない。この差は、国家形成を一つの文明の完成形としてではなく、地域ごとに異なる証拠と政治規模を持つ過程として捉える必要を示す。

別解の役割 ①は専門職と正統性を軸に三地域を結び、②は史料の種類と断定可能性の差を前面に出します。

★自己採点の観点 ①三地域以上を扱ったか。②指定四語を因果の中で用いたか。③農耕・余剰から都市の記録・制度へ段階を進めたか。④政治形態と史料の地域差を留保したか。⑤固有名詞を証拠として用いたか。

使用した具体例の役割 ウルクは都市国家、エジプトは広域王権、インダスは標準化と史料限界、殷は祭祀・軍事型の別経路を示します。

十 この講のまとめ・他講との接続

この講の一文まとめ 都市は、周辺から集まる余剰・労働・祭祀・交易を神殿・宮殿へ集中させ、文字・規格・法・儀礼によって管理と正統性を持続させたが、政治規模と史料の残り方は地域ごとに異なった。

接続する講	この講から持ち越す問い
第一講 農耕革命	定住・貯蔵・余剰は、どの段階で都市の専門職と管理組織へ変わるか。
第三講 ポリス	同じ都市国家でも、王・祭司ではなく市民が統治主体になる条件は何か。
第四講 古代帝国	都市を越える領域支配は、地方官・道路・税・法をどう組み合わせるか。
第八講 交易ネットワーク	都市が国家の中心だけでなく、商人と港を通じる越境的結節点になると何が変わるか。

講末の自己確認

- 都市を人口の多い集落ではなく、余剰・祭祀・行政・軍事・交易の結節点として説明できる。
- 楔形文字・ヒエログリフ・印章・甲骨文字を、それぞれの用途と史料上の限界へ結べる。
- メソポタミアの都市分立とエジプトの広域王権を、河川だけでなく制度・戦争・正統性から比べられる。
- インダスの計画都市から共同調整は言えても、単一王朝を断定できない理由を説明できる。
- 農耕の余剰から、記録・専門職・統治の制度化までを段階的に言える。

考えを広げる三つの問い

問いの型	発展問い
比較	文字が未解読の文明と、行政文書が多く残る文明を、同じ確かさで論じないために何が必要か。
評価	大規模建築は、権力の強さ・共同体の協力・負担の重さをそれぞれどこまで示すか。
長期	都市の記録・標準化・法は、後の帝国が広い領域を治めるためにどう再利用されたか。

発展問い 都市は人々を結びつける装置であると同時に、資源と権力を集め、中心と周辺の差を作る装置でもあります。この二面性は現代都市にも残っているでしょうか。

第二部 第一分冊 | 本制作

第三講 ポリスと市民共同体を具体でつかむ

軍事負担・経済的自立・討議を結び、市民資格と排除の境界を読む

対応	第一部 第 3 章「市民共同体の誕生（ギリシア）」	構成	15 頁
時間	前 8 世紀～前 4 世紀	地域	エーゲ海・地中海／アテネ・スパルタ

第一部の構造一文要約 ポリスは武装市民の合議による統治モデルを生んだ。

中心問い なぜギリシアでは、王ではなく市民が国家を担ったのか。

一 この講のねらい

ポリスの政治参加を、自営農民・重装歩兵・海軍・交易・社会対立・討議空間の結びつきから説明します。アテネ民主政を近代民主主義の完成形として扱わず、参加が段階的に広がったことと、女性・在留外人・奴隷が市民資格から排除されたことを同じ構造の中で捉えます。

二 構造の確認

観点	この講で問うこと
ポリス	都市と周辺農村を含む独立共同体は、誰を成員としたか。
軍事負担	重装歩兵・海軍漕手としての役割は、政治的発言へどう結びついたか。
経済・社会	土地所有、債務、交易、植民市建設は、市民層と対立をどう変えたか。
制度	民会・評議会・法廷は、討議・抽選・投票をどう政治技術にしたか。
境界	市民の平等は、女性・在留外人・奴隷・被支配者の排除とどう併存したか。

この講の前提 『重装歩兵が民主政を生んだ』という一つの原因だけでは説明しません。軍事参加は重要な条件でしたが、貴族間競争、債務問題、法改革、海軍、帝国収入、制度設計が時期ごとに重なりました。

三 時間と地域の見取り図

ポリスはギリシア本土だけでなく、エーゲ海・黒海・地中海沿岸へ広がりました。植民市は本国の単なる出張所ではなく、独立したポリスとして交易・土地利用・文化交流の結節点になりました。



図1 ポリス世界と植民市建設の主な広がり（経路・位置は学習用の概略）

時期	主な動き	構造上の意味
前 8～7 世紀	ポリス形成・植民市建設・重装歩兵の普及	独立共同体と市民軍の基礎
前 594 年頃	ソロンの改革	債務問題を緩和し、財産に応じ参加を再編
前 508～507 年頃	クレイステネスの改革	区・部族・五百人評議会で市民を再編
前 490～479 年	ペルシア戦争	重装歩兵と海軍漕手の重要性が高まる
前 5 世紀	アテネ民主政・デロス同盟	参加拡大と対外支配が併存
前 431～404 年	ペロポネソス戦争	ポリス間対立と市民共同体の緊張
前 338 年	カイロネイアの戦い	マケドニア覇権下でポリス自立が制約

時間差を読む ソロンとクレイステネスの間にも約 80 年があり、海軍漕手の発言力が高まるのはペルシア戦争期以後です。アテネ民主政を一人の改革者が一度に完成させたとは考えません。

四 具体マッピング

制度名を、担い手・解決した対立・参加範囲・限界まで結びつけます。

構造・観点	具体例	構造上の意味	答案での役割
共同体	ポリス・アゴラ・アクロポリス	都市と周辺農村、祭祀、防衛、討議を結ぶ。	市民共同体の空間を示す
拡大・交流	植民市建設	土地・交易の課題から独立ポリスが各地に形成。	統一国家でない広がりを示す
陸軍	重装歩兵・密集隊形	自費武装した市民が横列で防衛を担う。	軍事負担と発言を結ぶ
債務・法	ソロンの改革	債務奴隷化を抑え、財産等級で参加を再編。	社会対立から制度改革へ
市民再編	クレイステネス・区・十部族	血縁・地域派閥を組み替え、評議會を整える。	制度設計が参加を作る例
直接参加	民会・五百人評議會・民衆裁判所	討議・投票・抽選を日常の政治技術にする。	合議制の具体
海軍	三段櫓船・漕手	無産市民も防衛と帝国海軍を担う。	下層市民の重要性を示す
排除	女性・在留外人・奴隷	居住・労働・家計を担っても市民権を持たない。	参加の限界を示す
比較	スパルタ人・ペリオイコイ・ヘイロータイ	市民軍と被支配労働を結ぶ狭い市民共同体。	アテネとの同軸比較
対外関係	デロス同盟	同盟財政と海軍が民主政を支えつつ、他ポリスを従属。	内の参加と外の支配を結ぶ

後世を遡らせない 古代の『市民』は全住民ではなく、政治参加・軍事・土地・家系に結びつく限定資格でした。近代の普通選挙・個人の普遍的な人権を、そのまま古代へ当てはめません。

五 地域・国家・事例別に見る — ポリス形成

1 独立共同体と植民市 — 一つのギリシア国家ではない 【中核】

核となる見方 ポリスは市街地だけでなく周辺農村・土地・祭祀・防衛を含み、成年男性市民が『自分たちの共同体』として政治を担う単位でした。

形成 前8世紀頃から、集落・有力者・祭祀中心がまとまり、アゴラやアクロポリスを持つポリスが各地に形成されました。山が多い地形だけで分立を説明せず、地域ごとの有力者関係、農地、港、戦争、祭祀のまとまりを見ます。

植民市 土地不足、社会対立、交易機会などを背景に、ギリシア人は南イタリア・シチリア・黒海沿岸などへ植民市を建設しました。母市と祭祀・交易の関係を保っても、植民市は原則として独立したポリスであり、統一帝国の地方都市ではありませんでした。

重装歩兵 盾・槍・甲冑を自費で備える中小土地所有者が密集隊形を作り、共同体の防衛を担いました。横列の協働と軍事負担は、貴族だけが政治を独占する体制を問い直す条件になりました。

因果の留保 重装歩兵が存在しても、直ちに民主政になるわけではありません。寡頭政や僭主政を取るポリスもありました。軍事負担が発言要求へ変わるには、法改革・社会対立・制度の受け皿が必要でした。

具体	構造上の役割	言い過ぎを避ける点
ポリス	独立した市民共同体	ギリシア全体の統一国家ではない
植民市	交易・土地・文化接触の拠点	母市の属州ではない
重装歩兵	防衛負担と発言要求を結ぶ条件	民主政の単独原因ではない

答案での使い方 『自費武装した市民が防衛を担ったため政治的発言を求めた』と書いた後、法改革や制度設計を加え、軍事から民主政へ因果を一段で飛ばさないようにします。

五 地域・国家・事例別に見る（アテネ）

2 ソロンからクレイステネスへ — 対立を制度へ組み替える 【中核】

ソロン 前 594 年頃、債務をめぐる対立の中で、債務奴隷化の禁止・解放や財産等級に応じた政治・軍事参加の再編を進めました。貴族支配を一挙に廃したのではなく、出生だけでなく財産と役割を政治へ組み込む道を広げました。

僭主政を挟む過程 ペイシストラトスとその子らの僭主政は、貴族間対立を抑え、公共事業・祭祀・農村支援を進めました。民主政と正反対の一時的逸脱として消すのではなく、ポリス全体を王族以外の中心へまとめる過程に位置づけます。

クレイステネス 前 508～507 年頃、居住区である区を基礎に十部族を編成し、五百人評議會を整えました。海岸・市街・内陸を組み合わせた部族編成は、古い地域・血縁の派閥を組み替え、市民を新しい政治単位へ結びました。

民会・評議会・法廷 民会は重要事項を討議・決定し、評議会は議案と行政を準備し、民衆裁判所は市民の参加を法判断へ広げました。抽選・任期制・監査は、公職を一部有力者の恒久的所有にしにくくする仕組みでした。

改革・制度	解決しようとした課題	参加の変化
ソロン	債務・身分対立	財産等級に応じて役割を再編
クレイステネス	地域・血縁派閥	区・部族・評議会で市民を再構成
民会・法廷	意思決定と権力監視	市民の討議・投票・裁判参加
陶片追放	有力者の権力集中への警戒	制度的排除だが毎年必ず実施ではない

見落とさない点 改革は直線的な民主化の計画ではなく、その時点の対立への応答でした。制度の意味は、後の民主政から逆算せず、何を調整したかで読みます。

五 事例別に見る——海軍・排除・スパルタ

3 参加の拡大と境界 — 民主政の内外を同時に見る 【中核】

アテネの海軍と下層市民

ペルシア戦争期、三段櫓船の漕手となった無産市民（テテス）は、ポリス防衛に不可欠な役割を担いました。前5世紀には公職手当なども参加を支えました。しかしデロス同盟の貢納と海軍支配がアテネの財政・政治を支え、内部の民主政が同盟市への強制と併存しました。

市民資格の外側

政治参加の中心は、アテネ人の両親を持つ成年男性市民へ狭められました。女性は家・祭祀・相続に重要な役割を持って民会へ参加せず、在留外人は交易・手工業を担っても市民権を持たず、奴隷は家内・工房・鉱山などで労働しました。市民の時間と自立は、非市民の労働にも支えられていました。

スパルタ — 市民軍と被支配労働

スパルタでは、スパルタ人男性市民が共同食事・軍事訓練・民会へ参加し、長老会・監督官・二王制が権力を分けました。周辺のペリオイコイは生産・交易・軍事を担い、ヘイロータイは土地を耕す被支配身分でした。狭い市民団が軍事共同体を保つ仕組みは、アテネと異なる市民政治です。

比較軸	アテネ	スパルタ
軍事	重装歩兵＋海軍漕手	重装歩兵中心の市民軍
意思決定	民会・評議会・民衆裁判所	民会・長老会・監督官・二王
労働基盤	市民農民・在留外人・奴隷	ペリオイコイ・ヘイロータイ
参加の限界	女性・在留外人・奴隷を排除	市民団が狭く、被支配者が多数

単純な二分を避ける アテネ＝民主的、スパルタ＝軍国的とだけ覚えません。両者とも限定された市民が政治と軍事を担い、異なる非市民層の労働と支配の上に共同体を成り立たせました。

六 比較して整理する／七 答案パーツ

比較軸	アテネ	スパルタ	王権型都市国家
統治主体	男性市民団	狭い男性市民団	王・祭司・官僚
軍事の担い手	重装歩兵・海軍漕手	重装歩兵市民	王の軍・従属兵力
意思決定	民会・評議会・法廷	民会・長老会・監督官・王	王令・宮殿・神殿
参加の根拠	市民資格・軍事・制度	出生・共同食事・軍役	身分・任命・宗教権威
非市民	女性・在留外人・奴隷	ペリオイコイ・ヘイロータイ	農民・被支配者・奴隷等
正統性	市民の討議と法	祖制・軍事共同体・複合制度	神意・王統・祭祀

比較の結論 ポリスの特色は王が不在なこと自体ではなく、市民資格を持つ者が軍事負担と意思決定を結び、討議・投票・抽選を制度化したことです。ただし、その市民平等は共同体の全住民へ及びませんでした。

一文説明（49 字） アテネでは自費武装した重装歩兵が防衛を担い、その軍事負担が市民の政治的発言を支える一条件となった。

短い説明（90 字） ソロンは債務問題を緩和し、クレイステネスは区・部族・評議会を再編して、市民参加の制度を広げた。ただし参加は成年男性市民に限られ、女性・在留外人・奴隷を含む全住民の平等ではなかった。

統合説明（140 字） 王権型都市国家では王・祭司・官僚が余剰と軍事を管理したのに対し、ポリスでは限定された男性市民が軍事を担い、民会・評議会・法廷で合議した。アテネは海軍漕手まで参加を広げ、スパルタは狭い市民軍をヘイロータイの労働で支えた。市民共同体は統治主体を変えたが、参加と排除を同時に制度化した。

問題編 制度と担い手を対応させ、軍事から政治への因果を組み立てる

八 ミニ演習

問一 制度・改革を担い手と構造へ結びつける

次の用語について、最も関係の深い担い手または制度上の働きを語群から一つ選びなさい。

語群 重装歩兵市民／債務対立の調整／市民の地域的再編／直接参加／海軍漕手／被支配労働

用語	主な担い手・働き	構造上の意味
密集隊形		
ソロン		
区・十部族		
民会		
三段櫓船		
ヘイロータイ		

問二 軍事負担と政治参加の関係を留保付きで説明する

重装歩兵に触れ、軍事参加が政治的発言の拡大を促し得た理由と、それだけで民主政の成立を説明できない理由を 80～100 字で説明しなさい。

組み立ての手がかり 自費武装・共同防衛→発言要求→法改革・社会対立・制度が受け止める→自動的結果ではない

問題編 市民資格・軍事・意思決定・被排除者を同じ軸で比べる

問三 アテネとスパルタの市民共同体を比べる

アテネとスパルタの共通点と相違点を、市民資格・軍事の担い手・意思決定機関・非市民層の四軸から 110～130 字で説明しなさい。

比較軸	アテネ	スパルタ
市民資格		
軍事		
意思決定		
非市民層		
共通点		

比較の順序 両者とも限定市民の政治であるという共通点→軍事と制度の差→労働と排除の差、の順にまとめる。

問題編 民主政の成果と排除を、一つの構造に収める

問四 アテネ民主政の成立条件と限界を説明する

ソロンまたはクレイステネス、民会、海軍のうち二つ以上に触れ、アテネ民主政が参加を広げた条件と、市民資格の限界を 120～140 字で説明しなさい。女性・在留外人・奴隷の三語を用いること。

答案の位置	必要な内容
成立条件	社会対立・改革・軍事参加・制度
参加の形	民会・評議会・法廷・抽選等
資格の境界	女性・在留外人・奴隷の排除
評価	参加拡大と限定性を同時に書く

設問条件 『民主政だから平等だった』とも、『排除があったから民主政に意味がない』ともせず、誰の参加がどう広がり、誰がなぜ外に置かれたかを示す。

問題編 王権型都市国家との比較から、市民共同体の歴史的意義を論じる

問五 ポリスの統治原理と限界を統合して論じる

王権型都市国家と比較し、ギリシアのポリスが生んだ統治原理の特徴と限界を 180～220 字で論じなさい。軍事負担・市民資格・合議・排除の四語を必ず用い、アテネとスパルタの双方に触れること。

答案の位置	メモする内容
比較の起点	王・祭司中心の統治との違い
共通構造	市民資格＋軍事負担＋意思決定
アテネ	改革・民会・海軍・参加拡大
スパルタ	狭い市民軍・複合制度・被支配労働
限界	女性・在留外人・奴隷・ヘイロータイ等の排除
評価	合議という政治技術と限定された成員資格

最終確認 180～220 字。王権型との比較→ポリス共通構造→アテネ・スパルタの差→排除を含む評価、の順に書く。

解答編 制度名を、担い手・対立・参加へ戻す

九 解答と考え方

問一 解答

用語	主な担い手・働き	構造上の意味
密集隊形	重装歩兵市民	共同防衛と政治的発言を結ぶ条件
ソロン	債務対立の調整	出生だけでなく財産・役割で参加を再編
区・十部族	市民の地域的再編	血縁・地域派閥を新単位へ組み替える
民会	直接参加	市民が討議・投票で重要事項を決める
三段櫓船	海軍漕手	下層市民の軍事的重要性を高める
ヘイロータイ	被支配労働	スパルタ市民軍の生活基盤を支える

考え方 人物名は『改革を行った人』で終わらず、どの対立を、どの制度へ組み替えたかまで説明します。

問二 解答

模範解答（98字） 重装歩兵は自費武装した市民が密集隊形で共同防衛を担うため、軍事負担を根拠に発言を求める条件となった。ただし民主政には債務対立への改革、海軍、民会などの制度も必要で、軍事だけから自動的に成立しない。

別解例（98字） 共同体の防衛に不可欠な重装歩兵市民は、貴族政治を問い直す力を持ち得た。しかし同じ市民軍を持つポリスでも寡頭政や僭主政があり、社会対立を調整する法と参加制度が整わなければ民主政には結びつかなかった。

★**自己採点の観点** ①自費武装・共同防衛を発言要求へつないだか。②軍事負担を民主政の単独原因にしなかったか。③改革・社会対立・海軍・制度から一つ以上を加えたか。

使用した具体例の役割 重装歩兵は参加の条件、寡頭政・僭主政の存在は『自動的結果ではない』という留保になります。

解答編 同じ市民政治の中に、制度差と排除の差を置く**問三 解答**

模範解答（123 字） アテネとスパルタは、限定された男性市民が軍事と政治を担う点で共通する。アテネでは重装歩兵と海軍漕手が民会・法廷へ参加した。スパルタでは市民軍が民会・長老会・監督官の下で政治を担ったが、ヘイロータイの労働に依存した。両者とも女性や非市民を排除した。

別解例（115 字） 両ポリスは全住民ではなく男性市民へ資格を限り、防衛負担と意思決定を結びつけた。アテネは海軍漕手を含む市民が民会・評議会・法廷へ広く参加したのに対し、スパルタは狭い市民団が軍役と共同食事を担い、ペリオイコイとヘイロータイを支配した。

★自己採点の観点 ①限定男性市民という共通点を書いたか。②軍事・意思決定・非市民層を同じ軸で比べたか。③アテネ対民主、スパルタ対軍国という一語比較で終えなかったか。

問四 解答

模範解答（125 字） ソロンの債務改革とクレイステネスの区・部族再編は、市民を貴族の血縁から切り離し、地域単位へ再編して、民会などの参加制度を広げた。海軍漕手となった下層市民も発言力を増した。しかし市民資格は成年男性に限られ、女性・在留外人・奴隷は政治参加から排除された。

別解例（120 字） アテネでは民会・評議会・法廷を通じ、市民が討議・投票・抽選で政治を担った。ペルシア戦争後は海軍を支えた無産市民の重要性も高まった。一方、女性は家と祭祀、在留外人は交易、奴隷は生産を担っても市民資格を持たず、参加の拡大は全住民へ及ばなかった。

★自己採点の観点 ①改革・民会・海軍から二つ以上を因果へ入れたか。②指定三語を市民資格の外側として位置づけたか。③成果と限界を同じ説明に収めたか。

使用した具体例の役割 民会と海軍は参加拡大、女性・在留外人・奴隷は成員資格の境界を示します。

解答編 統治主体の転換を、参加と排除の両面から評価する**問五 解答**

模範解答（202字） 王権型都市国家では王・祭司・官僚が余剰と軍事を管理したが、ポリスでは市民資格を持つ男性が軍事負担と政治参加を結び、合議で共同体を運営した。アテネは改革と海軍を通じて民会・法廷への参加を広げ、スパルタは狭い市民軍を複合的な機関の下に置いた。しかしアテネの女性・在留外人・奴隷、スパルタのヘイロータイらは排除された。ポリスの意義は全員の平等ではなく、限定市民が権力の担い手となる統治原理を制度化した点にある。

別解例①（184字） ポリスは都市と農村を含む独立共同体であり、王の命令ではなく、市民資格を持つ者の討議と投票を正統性の一部とした。自費武装する重装歩兵の軍事負担は発言要求を支え、アテネではソロン・クレステネスの改革と海軍漕手の重要化が合議を広げた。スパルタも男性市民団が政治と軍事を担ったが、制度と労働基盤は異なる。いずれも女性・奴隷・非市民の排除を伴い、参加と成員境界を同時に作った。

別解例②（193字） ギリシアの市民共同体は、軍事負担を担う男性市民が民会などで合議し、王や祭司だけに統治を委ねないモデルを示した。アテネでは区・部族・評議会の再編と海軍が参加層を広げた一方、デロス同盟への支配も民主政を支えた。スパルタでは狭い市民資格とヘイロータイ支配が市民軍を維持した。したがって後世への意義は、近代民主主義の完成ではなく、討議による統治と排除された成員の境界を同時に考えさせる点にある。

別解の役割 ①は軍事負担と改革を中心に組み立て、②は対外支配・労働基盤も含めて『参加を可能にした外側』を強調します。

★自己採点の観点 ①王権型との統治主体の差を示したか。②指定四語を構造の中で用いたか。③アテネとスパルタの双方を扱ったか。④参加と排除を両方評価したか。⑤近代民主主義を古代へ遡らせなかったか。

使用した具体例の役割 重装歩兵・民会・海軍は参加条件、ヘイロータイや女性・在留外人・奴隷は市民資格の境界を示します。

十 この講のまとめ・他講との接続

この講の一文まとめ ポリスは、限定された男性市民の軍事負担・経済的自立・討議を結び、民会などの合議を統治原理にしたが、市民平等は女性・在留外人・奴隷・被支配者の排除と併存した。

接続する講	この講から持ち越す問い
第二講 都市国家	余剰を王・祭司が管理する都市から、市民が統治主体になると何が変わるか。
第四講 古代帝国	ポリスの自立と市民資格は、ローマの征服・都市統治・市民権拡大へどう組み替えられるか。
第十五講 市民革命	古代の限定市民と、近代の主権・権利・国民は何が共通し、何が異なるか。
第十七・十九講	国民の動員と権利拡大は、成員資格と排除の境界をどう再編するか。

講末の自己確認

- ポリスを市街地だけでなく、周辺農村・祭祀・軍事を含む独立共同体として説明できる。
- 重装歩兵と民主政の間に、社会対立・改革・海軍・制度という段階を置ける。
- ソロンとクレステネスの改革を、完成した民主政から逆算せず説明できる。
- アテネとスパルタを、市民資格・軍事・意思決定・非市民層の同じ軸で比べられる。
- 市民参加の意義と、女性・在留外人・奴隷・ヘイロータイの排除を同時に書ける。

考えを広げる三つの問い

問いの型	発展問い
比較	アテネの民主政とローマ共和政は、市民資格・代表・法・軍事をどう異ならせたか。
評価	民主政を、制度内部の参加だけでなく、家計・労働・帝国収入まで含めて評価すると何が見えるか。
長期	『市民』が都市共同体の資格から国民国家の成員へ変わると、権利と義務はどう広がるか。

発展問い 討議に参加できる者の範囲を広げることと、参加のための時間・教育・生活基盤を保障することは、同じ課題でしょうか。古代と現代を直接同一視せずに考えよう。

第四講 古代帝国を具体でつかむ

軍事征服を、持続する広域統治へ変えた装置を比べる

対応	第一部 第 4 章「広域支配の原理（帝国）」	構成	15 頁
時間	前 6 世紀～3 世紀	地域	西アジア・東アジア・地中海／比較：南アジア

- 第一部の構造一文要約 帝国は軍事と制度により広域社会を統合した。
- 中心問い 広域帝国はどのような構造によって成立し、維持されたのか。

一 この講のねらい

アケメネス朝・秦漢・ローマを同じ比較軸で並べ、軍事征服の後に必要となった交通、地方行政、徴税、法、標準化、現地社会との協力を具体名へ結びつけます。マウリヤ朝を比較に加え、行政装置へ共通理念を重ねる働きも見ます。

二 構造の確認

観点	この講で問うこと
軍事	征服は広域支配の入口だが、なぜ軍事力だけでは維持できないか。
交通・情報	命令・報告・軍隊・税・物資を、中央と地方の間でどう動かしたか。
行政・財政	誰が地方を治め、どの単位で税と兵力を集めたか。
多様性	慣習・都市・地方有力者を残しながら、中央の要求をどう貫いたか。
標準化・編入	法・文字・度量衡・市民権・理念は、支配をどう日常化したか。

この講の前提 『帝国＝中央が全地域を同じ制度で直接支配する国家』ではありません。中心・属州・辺境・属国では支配密度が異なり、直接統治と間接統治、強制と協力を異なる割合で組み合わせました。

三 時間と地域の見取り図

前 6 世紀から 3 世紀までを一つの幅に置き、帝国の成立・再編・長期化を比べます。最大領域だけでなく、中央から命令と資源を動かす距離、地方社会の多様さ、制度を受け継ぐ時期差を見ます。

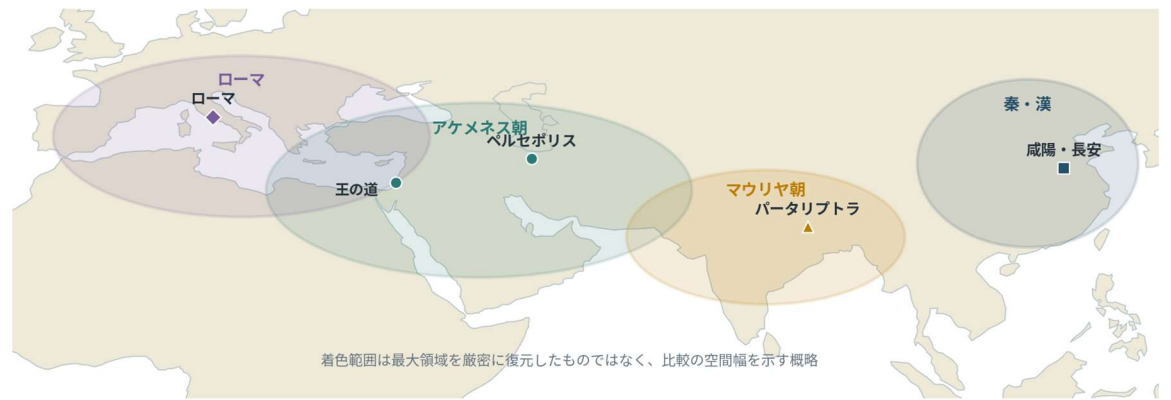


図 1 四つの古代帝国の空間幅（着色範囲・位置は比較用の概略）

地域・帝国	前 6～4 世紀	前 3 世紀	前 2～1 世紀	1～3 世紀
アケメネス朝	前 550 年頃成立／制度整備	前 330 年滅亡	後代へ制度継承	—
マウリヤ朝	—	前 322 年頃成立／アショーカ王	前 185 年頃滅亡	—
秦・漢	戦国諸国の改革	前 221 年秦統一／前 202 年漢	郡国制から再編	後漢／220 年滅亡
ローマ	イタリアで拡大	地中海へ征服	属州拡大／前 27 年元首政	道路・都市・法／212 年市民権

同時性を読む 前 3 世紀には、マウリヤ朝・秦漢・拡大期のローマが重なります。いずれも征服地を行政へ組み替える課題に直面しましたが、地方統治・標準化・正統性の言語は同じではありません。

- 陸上帝国も河川・海路を使い、海を中心とするローマも街道と辺境軍を必要とした。
- 同じ帝国の中でも、成立期・安定期・再編期に中央と地方の関係は変わった。

四 具体マッピング

固有名詞を、どの統治課題に応じたか、答案の何を証明するかまで結びつけます。

統治課題	アケメネス朝	秦漢	ローマ	答案での役割
征服・防衛	多民族軍・駐屯軍	統一戦争・辺境軍	軍団・補助兵	成立の入口と維持費
地方行政	サトラップ・現地官僚	郡県官吏／漢初の王国	属州総督・都市・有力者	中央と地方の仲介
税・兵役	地域別の貢納・兵力	戸籍・田租・徭役・兵役	属州税・関税・軍団維持	財政と軍事の循環
交通・情報	王の道・駅伝	道路・河川・駅伝	街道・地中海航路	遠隔支配の反復
法・標準化	王令・行政語・貨幣	法・文字・度量衡・貨幣	ローマ法・貨幣・都市制度	共通規範と予測可能性
現地慣習	既存官僚・宗教を利用	秦の統一／漢の調整	都市自治・地方法を利用	直接・間接統治の併用
住民編入	王への服属・貢納	戸籍・行政・共通規格	市民権の段階的拡大	成員資格の差
正統性	諸王の王・王の秩序	皇帝権・漢の儒学秩序	皇帝権・法的身分・都市忠誠	強制以外の服従理由

固定図式を越える 『寛容なペルシア・苛烈な秦・市民権のローマ』と一語で代表させると、強制・交渉・標準化の併用と時期差が消えます。特徴は比較の入口であって、結論ではありません。

五 地域・国家・事例別に見る — アケメネス朝

1 地域差を残して王へ結ぶ 【中核】

核となる見方 王は全地方を同じ制度へ塗り替えるのではなく、サトラップと現地の行政組織を通じて、租税・兵力・忠誠を確保しました。

サトラップ制 前 6 世紀に西アジアからエジプト・小アジアへ広がった帝国は、広域を行政区に分け、王が任命するサトラップに地方統治を担わせました。サトラップは徴税・軍事動員・治安を担い、地域の官僚・書記・有力者も利用しました。

王の道と駅伝 スサから小アジア方面を結ぶ王の道などは、命令・報告・使者・軍隊・物資を動かしました。道路が存在するだけでなく、駅・宿・供給・護衛を維持することが、遠隔支配を反復可能にしました。

中央の監督 地方長官へ大きな権限を与える一方、王の監察、軍事権・財政権の分担、王宮との通信によって地方の自立を抑えようとしていました。中央と地方の間には協力と警戒が併存しました。

慣習の利用 現地の宗教・法・官僚を一定程度残すことは、単なる善意ではなく、地域社会を破壊せず租税と服属を確保する統治技術でした。ただし反乱には軍事的鎮圧も行われ、『寛容』だけで帝国を説明できません。

具体	解決した課題	答案での役割
サトラップ	地方行政・徴税・軍事	中央と地方を結ぶ仲介
王の道・駅伝	命令・報告・軍・物資の移動	交通が統治を反復させる証拠
現地官僚・慣習	支配コストと地域協力	多様性を残す統合

答案での使い方 『間接統治』『中央と地方の仲介』『現地制度を利用した多民族統治』を説明する具体例として使い、王への貢納・兵力供出という強制も併記します。

五 地域・国家・事例別に見る（秦漢）

2 行政と標準を領域へ浸透させる 【中核】

核となる見方 秦は中央任命の官吏を郡県へ置き、文字・度量衡・貨幣などを統一して、旧諸国の境界を共通の行政空間へ組み替えました。漢は枠組みを継承しつつ再編しました。

秦の統一 前 221 年、秦は諸国を統一し、郡県制の下で地方官を任命しました。法令・文字・度量衡・貨幣・車軌などの標準化は、文書行政・徴税・取引・軍需・物資移動に共通規格を与えました。

動員と短命 道路・長城・宮殿・陵墓・軍事への大規模動員は統一を可視化しましたが、重い負担と急速な統制は反乱の条件にもなりました。制度を強く及ぼすことと、長期に受け入れられることは同じではありません。

漢の再編 漢は郡県だけでなく諸侯王国を併存させる郡国制から出発し、前漢中期にかけて王国を抑え、中央の統制を強めました。秦の制度をそのまま固定せず、負担・地方勢力・皇帝権・儒学的正統性を調整しました。

辺境と多様性 戸籍・租税・官僚制が支配の核でも、北方遊牧勢力、西域、南方、朝貢関係には同じ密度の郡県支配が及びませんでした。帝国の境界は線一本ではなく、軍事・交易・婚姻・服属の段階を持ちました。

時期	地方統治	構造上の意味
秦	郡県・官吏・標準化を急速に浸透	直接統治と共通規格
漢初	郡県と諸侯王国を併用	妥協を含む再統合
前漢中期以後	王国抑制・官僚制・儒学秩序	長期統治への再編

見落とさない点 『秦漢』を一様な中央集権として圧縮しません。秦が制度の枠を強く作り、漢が王国・地方社会・理念との関係を時間をかけて組み直した差を答案に残します。

五 地域・国家・事例別に見る（ローマとマウリヤ朝）

3 ローマ — 都市と法的資格を通じて編入する 【中核】

属州と地方有力者 ローマは征服地を属州として総督の監督下に置き、軍事・徴税を確保しました。しかし日常行政のすべてを中央官吏が直接担わず、都市共同体と地方有力者を利用しました。

交通と法 ローマ街道と地中海航路は軍団・官吏・税・穀物・情報を動かししました。ローマ法・貨幣・都市制度が共通性を与える一方、地方の言語・慣習・地方法も残りました。

市民権 市民権はイタリアから属州住民へ段階的に広がり、212 年のアントニヌス勅令で原則として帝国内の自由身分者へ付与されました。法的編入は進みましたが、社会的不平等や地方差が消えたわけではありません。

4 マウリヤ朝 — 行政に道徳的な言語を重ねる 【比較】

アショーカ王 前 3 世紀、カリング征服後、岩石・石柱法勅を各地に刻み、節制、他宗派への尊重、住民の安寧、官吏の責務などをダルマの言葉で示しました。

法勅の役割 法勅は行政装置を廃止するものではなく、王が望む秩序を遠隔地へ伝え、統治へ正統性と行動規範を重ねました。ダルマを仏教の単純な国教化とみなさず、異なる集団にも届く道徳的・政治的表現として読みます。

比較例	住民を結ぶ媒体	次講への橋
ローマ	都市制度・法・市民権	法的資格が成員を広げる
マウリヤ朝	法勅・ダルマ・官吏	理念が行政を正当化する

比較への橋 四例はいずれも軍事征服を交通・地方官・税制による反復的統治へ変え、法・資格・理念を重ねました。次の第五講では、その理念が国家を越えて広がる仕組みを扱います。

六 比較して整理する／七 答案パーツ

比較軸	アケメネス朝	秦漢	ローマ
中央と地方	王—サトラップ—現地官僚	皇帝—中央官僚—郡県／王国	中央—属州総督—都市・有力者
税と軍事	地域別の貢納・兵力	戸籍・土地・行政で把握	属州税等で軍団を維持
交通	王の道・駅伝	道路・河川・駅伝	街道・地中海航路
法・標準化	王令・行政語・貨幣＋地域差	法・文字・度量衡・貨幣	ローマ法・貨幣＋地方法
現地社会	既存官僚・宗教・慣習を利用	秦の統一／漢の調整	都市自治・地方有力者を利用
住民編入	服属・納税を軸に保持	戸籍・行政・共通規格	市民権を段階的に拡大

比較の結論 三帝国は軍事・交通・地方行政・財政を結ぶ点で共通します。違いは、中央規範をどこまで直接及ぼすか、現地制度をどう使うか、住民をどの資格で帝国へ編入するかに表れます。

一文説明（49 字） アケメネス朝はサトラップに徴税と軍事動員を担わせ、王の道で中央の命令と地方の情報を広域に通わせた。

短い説明（96 字） アケメネス朝が現地官僚と慣習を利用したのに対し、秦は郡県へ官吏を置き、文字や度量衡を統一した。両者の差は、地方の制度を利用するか、中央の規範を直接浸透させるかに表れるが、漢では王国も併存した。

統合説明（150 字） アケメネス朝・秦漢・ローマはいずれも、征服後に交通網・地方行政・徴税を整えて広域支配を持続させた。ただし、アケメネス朝は現地慣習と官僚を利用し、秦漢は郡県制と標準化を進め、ローマは都市と地方有力者を介しつつ市民権を広げた。帝国は一様な直接支配ではなく、中央の要求と地域社会の協力を異なる方法で結んだ。

問題編 制度を分類し、交通が征服を日常統治へ変える因果を書く

八 ミニ演習

問一 制度を帝国と統治課題へ結びつける

次の用語について、最も関係の深い帝国を記し、主な統治課題を語群から一つ選びなさい。

語群 地方行政／交通・情報／標準化／住民編入／正統性

用語	帝国	主な統治課題
サトラップ制		
王の道		
郡県制		
文字・度量衡の統一		
属州		
市民権の拡大		
岩石・石柱法勅		

問二 交通網が支配を日常化する因果を説明する

王の道、秦漢の道路、ローマ街道のいずれか二つに触れ、交通網が帝国の維持に果たした役割を、徴税・軍事・情報のうち二つ以上を用いて 80～100 字で説明しなさい。

組み立ての手がかり 経路と駅を維持する→人・物・命令が反復して動く→征服が継続的な行政へ変わる

問題編 中央と地方、現地制度の利用を同じ軸で比べる

問三 アケメネス朝と秦漢の地方統治を比べる

アケメネス朝と秦漢の地方統治の違いを、中央と地方、現地制度・慣習の二軸から 100～120 字で説明しなさい。サトラップ制・郡県制の語を用い、秦と漢の時期差も残すこと。

比較軸	アケメネス朝	秦漢
中央と地方		
現地制度・慣習		
標準化		
時期差・留保		

比較の順序 サトラップと郡県官吏の位置→現地制度を残す度合い→漢初の王国という留保、の順に書く。

問題編 支配と参加を、属州・地方有力者・市民権で結ぶ

問四 ローマの住民編入を説明する

ローマが征服地を帝国へ組み込んだ方法を 120～140 字で説明しなさい。属州・地方有力者・市民権の三語を必ず用い、総督の監督、日常行政、法的編入の関係を示すこと。

段階	必要な内容
支配の枠	属州・総督・徴税・軍事
日常行政	都市共同体・地方有力者
法的編入	市民権の段階的拡大
留保	法的統合と社会的平等を同一視しない

設問条件 『ローマは市民権を与えた』だけで終わらず、総督による監督と現地社会の協力を、市民権による編入へつなげる。

解答編 固有名詞を、統治上の役割へ戻す

九 解答と考え方

問一 解答

用語	帝国	主な統治課題	理由
サトラップ制	アケメネス朝	地方行政	徴税・軍事・治安を地方で担う。
王の道	アケメネス朝	交通・情報	王宮と地方の命令・報告を結ぶ。
郡県制	秦漢	地方行政	中央任命の官吏を行政単位へ置く。
文字・度量衡統一	秦	標準化	文書・徴税・取引の共通規格を作る。
属州	ローマ	地方行政	征服地を総督の監督へ置く。
市民権拡大	ローマ	住民編入	住民を法秩序の成員へ組み込む。
岩石・石柱法勅	マウリヤ朝	正統性	ダルマと官吏の責務を遠隔地へ示す。

問二 解答

模範解答（90 字） 王の道やローマ街道は中央の命令と地方の報告を伝え、軍隊を必要な地域へ移動させ、税や物資を運ぶ経路となった。駅や補給を保つことで往復を常態化し、征服後の遠隔支配を日常の行政へ変えた。

別解例（92 字） 秦漢の道路とローマ街道は、情報伝達と軍の移動を支え、租税や補給物資の輸送にも用いられた。中央と地方を繰り返し結び、支配者の一度の遠征ではなく、官吏と軍隊が継続して働く統治空間を作った。

★自己採点の観点 ①二つの交通網に触れたか。②徴税・軍事・情報から二つ以上を扱ったか。③交通から遠隔統治の反復へ因果を進めたか。

使用した具体例の役割 道路は地理的距離を消すのではなく、駅・補給・護衛を維持して命令と資源の往復を可能にする証拠です。

解答編 地方統治と住民編入を、同じ比較軸へそろえる**問三 解答**

模範解答（107 字） アケメネス朝は王が任命するサトラップを置き、現地の官僚や慣習を利用して租税と兵力を確保した。秦は郡県制で中央任命の官吏を置き、法・文字・度量衡を標準化した。ただし漢初には王国も併存し、中央集権は段階的に再編された。

別解例（109 字） サトラップ制では地方長官が王の要求を伝え、既存の宗教・官僚・慣習を残しながら貢納を集めた。秦漢の郡県制は中央の官吏と共通規格を地方へ及ぼしたが、漢は諸侯王国も用いた。両者の差は現地制度の利用と中央規範の浸透方法にある。

★自己採点の観点 ①指定二語を正しく対応させたか。②現地制度の利用と中央規範の浸透を比べたか。③秦と漢を一様にせず、漢初の王国を留保したか。

問四 解答

模範解答（120 字） ローマは征服地を属州として総督の監督下に置き、徴税と軍事を確保する一方、帝国各地の都市と地方有力者に日常行政を担わせた。さらに市民権を段階的に広げ、住民を法秩序の成員へ組み込んだ。直接統治だけでなく、現地社会の協力と法的編入を組み合わせた。

別解例（122 字） 属州では総督が軍事・徴税を監督したが、地方の裁判や徴税を含む地域運営の多くは都市共同体と地方有力者が担った。ローマは彼らを帝国秩序へ結びつけ、市民権を広げて住民の法的資格を変えた。ただし市民権の共有は地方差や社会的不平等の消滅を意味しなかった。

★自己採点の観点 ①指定三語を役割の違いへ結んだか。②総督の監督—地方有力者の協力—市民権の編入を段階化したか。③法的統合を平等化と同一視しなかったか。

使用した具体例の役割 属州は支配の枠、地方有力者は日常統治の担い手、市民権は法的編入の手段です。

解答編 共通条件の後に、中央と地方・住民編入の差を置く**問五 解答**

模範解答（170字） アケメネス朝・秦漢・ローマはいずれも軍事征服を出発点とし、交通網を整えて命令・軍隊・税・情報を動かし、地方統治の制度を設けて支配を持続させた。ただし、アケメネス朝はサトラップと現地官僚を利用し、秦漢は郡県制と標準化を進め、ローマは属州・都市・地方有力者を介した。住民編入でも、慣習利用、行政規範の浸透、市民権拡大という異なる経路が見られた。

別解例①（171字） 広域帝国の維持には、征服地へ軍を送るだけでなく、交通網で中央と地方を結び、徴税・命令・情報伝達を反復できる日常的な地方統治が必要だった。アケメネス朝はサトラップ制で現地制度を活用し、秦漢は郡県制と標準化によって中央規範を広げ、ローマは属州と都市共同体を利用した。このように住民編入の方法も、地域差を残す服属から市民権付与まで一様ではなかった。

別解例②（170字） 三帝国は交通網・地方官・税制を結び、遠隔地から継続的に人員と財を集めた点で共通した。しかし地方統治では、アケメネス朝がサトラップと現地官僚、秦漢が郡県官吏と共通規格、ローマが属州総督と地方有力者を用いた。したがって住民編入も、慣習を残す統治、行政的標準化、都市と市民権による法的統合という別々の形を取り、帝国は単一方式では維持されなかった。

別解の役割 ①は征服から日常統治への因果を前面に出し、②は中央と地方の担い手を同じ位置へそろえて比較します。

★自己採点の観点 ①三帝国を扱ったか。②交通・行政・財政の連動を共通条件にしたか。③地方統治と住民編入を同じ軸で比べたか。④指定三語を因果へ組み込んだか。⑤一様な直接支配としなかったか。

使用した具体例の役割 サトラップ・郡県・属州は地方統治、慣習利用・標準化・市民権は住民編入の差を示します。

十 この講のまとめ・他講との接続

この講の一文まとめ 古代帝国は、軍事征服を交通・財政・地方行政へつなぎ、現地社会との協力や法的・理念的な編入を重ねることで広域支配を持続させた。

接続する講	この講から持ち越す問い
第五講 精神的統合原理	制度だけでなく、共通理念は服従・連帯・国家への距離をどう変えたか。
第九講 文明圏	帝国の境界を越えて、宗教・言語・交易はどの空間を結んだか。
第十講 近世帝国	火器・常備軍・宗教共同体は、古代の地方統治をどう組み替えたか。
第十三・十八講	古代の編入と、近代の主権剥奪・人種化・経済従属は何が異なるか。

講末の自己確認

- 帝国維持を、軍事征服だけでなく交通・地方行政・財政・法へつなげて説明できる。
- サトラップ制・郡県制・属州を、中央と地方を結ぶ異なる制度として比べられる。
- 秦と漢の時期差、ローマの都市・地方有力者、アケメネス朝の現地制度利用を留保できる。
- 標準化・慣習利用・市民権を、住民編入の異なる方法として説明できる。
- 中心・属州・辺境・属国で支配密度が異なり、帝国が一様な直接支配でないと言える。

考えを広げる三つの問い

問いの型	発展問い
比較	アケメネス朝の慣習利用とローマの都市自治は、どちらも間接統治と呼べるか。
評価	市民権・共通法・標準化は、人々を包摂すると同時に何を失わせ得るか。
長期	古代帝国の道路・地方官・税制は、後の帝国や近代国家へどのように受け継がれたか。

発展問い 帝国の『寛容』を、道徳的評価ではなく統治技術として読むと何が見え、逆に被支配者の抵抗や強制を見失わないために何を加える必要があるか。

第五講 精神的統合原理を具体でつかむ

教え・担い手・制度・道を結び、国家を越える連帯と国家秩序を比べる

対応	第一部 第 5 章「精神的統合原理の成立」	構成	15 頁
時間	前 6 世紀頃～8 世紀頃	地域	南・西・東アジア、地中海、中央ユーラシア

第一部の構造一文要約 精神的統合原理は国家を超えて文明圏を形成した。

中心問い 広域社会は、いかなる精神的原理によって統合されたのか。

一 この講のねらい

宗教・思想を教義一覧としてではなく、誰が運び、どの制度が再生産し、国家とどの距離を取り、どの道を通して広がったかという統合の仕組みとして扱います。仏教・キリスト教・儒学を無理に同じ宗教型へ押し込まず、ユダヤ教とイスラームを比較・橋渡しに用います。

二 構造の確認

観点	この講で問うこと
教え・倫理	地域・身分を越える規範や、国家秩序の倫理化は何をもたらしたか。
担い手	僧侶・宣教者・商人・学者・官僚・信徒は、教えをどう運んだか。
制度	教団・寺院・教会・学校・官僚制は、教えをどう日常化・再生産したか。
伝播路	帝国の道路、都市、交易路、翻訳は、遠隔地の共通性をどう支えたか。
国家との距離	保護・公認・統治理念化・緊張は、教えと政治をどう結んだか。

この講の前提 理念だけで人々が一つになったわけではありません。聖典・教育・翻訳・教団・寺院・官僚・儀礼・交通網が、抽象的な教えを反復可能な生活制度へ変えました。

三 時間と地域の見取り図

前 6 世紀頃から 8 世紀頃までを扱います。成立・伝播・国家との結合は別の時点で起こり、後世の完成した教義・教団・国家制度を創始者の時代へ遡らせません。



図 1 主な教えの成立地域と伝播方向（矢印は往復・分岐・現地化を単純化した概略）

時期	南・中央アジア	西アジア・地中海	東アジア
前 6～4 世紀頃	仏教教団の形成	ユダヤ教の聖典共同体が発展	孔子と諸子の思想
前 3 世紀	アショーカ王の保護・法勅	ヘレニズム諸都市・ディアスポラ	戦国諸国の思想・制度競争
前 2～1 世紀	交易路を介する北西方面への展開	ユダヤ人共同体が広域に存在	前漢で儒学が国家制度へ接近
1～3 世紀	クシャーナ朝・仏教伝播	キリスト教の都市伝道・教会形成	儒学官僚・国家儀礼／仏教伝来
4～6 世紀	僧院・交易・翻訳で広域化	313 年公認／380 年国教化へ	仏典翻訳・寺院・儒仏道の展開
7～8 世紀	仏教圏の成熟と地域化	イスラーム共同体・初期拡大	東アジアの国家・宗教制度へ

時間差を読む キリスト教の成立から帝国公認まで約 3 世紀、儒学が官僚養成へ制度化されるのも孔子の時代より後です。『成立した教え』と『広域社会を統合する制度』を分けます。

四 具体マッピング

名称を、教え・担い手・制度・国家との距離・伝播経路へ対応させます。

統合課題	仏教	キリスト教	儒学	答案での役割
教え・倫理	苦・修行・解脱・慈悲	神・救済・隣人愛	仁・礼・徳・秩序	共通規範の内容を示す
担い手	僧尼・在家信者・商人	使徒・宣教者・司教・信徒	学者・官僚・教師	誰が広げたかを示す
制度	サンガ・寺院・僧院	教会・司教区・会議	学校・太学・官僚制・儀礼	理念の日常化・再生産
言葉・文書	経典・口承・翻訳	聖書文書・書簡・典礼	五経・注釈・教育	遠隔地の共通性
伝播路	交易路・巡礼・王の保護	都市・道路・地中海航路	国家教育・文書行政・文化交流	帝国・交通との結合
国家との関係	保護・寄進／国家を越える教団	迫害・公認・国教化	国家秩序の倫理化	距離と制度化の差
越境性	出家教団と在家信者を各地に形成	国家境界を越える教会共同体	国家を軸に東アジアへ影響	無理に同一化しない比較

比較の留保 儒学は救済宗教や独立教団と同じではありません。本講では、広域社会に共通の倫理・教育・儀礼を与える『統合媒体』として比べ、違いを消しません。

五 地域・国家・事例別に見る — 仏教

1 教団・王権・交易路 — 出家と在家を広域へ結ぶ 【中核】

核となる見方 仏教は教えだけでなく、出家者の教団であるサンガ、在家信者の寄進、寺院・僧院、交易・巡礼を通じて、地域を越える共同体を作りました。

成立と教団 ガンジス流域の都市化・諸国競争の中で、釈迦の教えを受け継ぐ出家教団が形成されました。身分や家を離れて修行する道は既存秩序を相対化しましたが、僧団は在家信者の食・衣・住・寄進に支えられました。

アショーク王 前3世紀、マウリヤ朝のアショーク王は仏教教団を保護し、法勅を通じてダルマを示しました。ただし法勅のダルマを仏教教義そのものと同一視せず、多様な住民へ届く王の倫理的統治言語としても読みます。

交易路と僧院 商人・隊商・港市の往来は、僧侶・経典・造像・寄進を運びました。僧院は巡礼者と商人を受け入れ、学問・翻訳・儀礼の拠点となり、中央アジアから中国・東南アジアへ教えが広がる際の中継点になりました。

現地化 仏教は一つの完成形がそのまま移動したわけではありません。言語・王権・既存信仰・社会制度との接触で、教義・儀礼・仏像・僧団の役割が地域ごとに変わりました。広域性は均一化ではなく、翻訳可能な共通性でした。

具体	担った役割	答案での使い方
サンガ	教え・規律・学問を継承	教団が理念を再生産
アショーク王	保護・法勅・正統性	帝国と教えの結合
商人・僧院・交易路	移動・寄進・翻訳	国家を越える伝播回路

見落とさない点 王の保護だけで仏教が広がったとは書きません。僧侶・在家信者・商人・翻訳者・地域の支配者という複数の主体が、異なる経路で教えを定着させました。

五 地域・国家・事例別に見る（キリスト教）

2 都市伝道から帝国公認へ ― 国家を越える教会を制度化する 【中核】

核となる見方 キリスト教はユダヤ教の伝統から生まれ、都市・道路・地中海航路を通じて広がり、各地の教会と司教を結ぶ共同体を形成しました。帝国との関係は迫害・容認・公認・国教化へ変化しました。

パウロと都市伝道 1 世紀、パウロらはアンティオキア・小アジア・ギリシア・ローマなどの都市を結び、書簡と移動を通じて非ユダヤ人にも信仰を広げました。都市の集会は地域共同体でありながら、同じ信仰と文書で遠隔地と結ばれました。

教会制度 司教・長老などの役割、礼拝・洗礼・慈善、聖書文書の共有、教義をめぐる会議が、教えを継承する制度を作りました。個人の内面だけでなく、救済・相互扶助・規律を持つ共同体が社会の中に根を張りました。

帝国との緊張 皇帝祭祀や公的秩序との摩擦から迫害が生じた時期もありましたが、帝国全体で常に同じ強さの迫害が続いたわけではありません。国家を相対化する信仰共同体である一方、都市秩序の中で生活する現実もありました。

公認と国教化 313 年の公認後、皇帝の保護・教会財産・公会議が教会制度を強め、380 年にはニカイア派キリスト教が帝国の正統信仰として位置づけられました。国家と結ぶことで広域統合力を得る一方、教義対立と異端排除も政治問題になりました。

段階	国家との距離	構造上の意味
成立・伝道	国家外の都市共同体	信仰・文書・慈善で越境的に結ぶ
迫害・容認	地域・時期により緊張	国家秩序と信仰忠誠の競合
公認・国教化	皇帝保護と制度結合	正統性強化と排除の制度化

後世を遡らせない 1 世紀の教会へ、4 世紀の公会議・国教・完成した教会制度をそのまま遡らせません。成立・制度化・国家結合を別の段階として書きます。

五 地域・国家・事例別に見る（儒学と比較例）

3 儒学 — 教育・官僚・儀礼で国家秩序を倫理化する 【中核】

孔子から国家制度へ 孔子は前 6～5 世紀の諸国競争の中で、仁・礼・徳による人間関係と政治を説きました。しかし儒学が国家統合の中心になるのは後代です。前漢武帝期以後、五経の学問、太学、官僚登用、国家儀礼が皇帝秩序と結びつきました。

統合媒体 官僚・学者が経典と注釈を学び、文書行政と儀礼を担うことで、中央の規範は地方へ伝えられました。家族倫理・君臣秩序・教育は社会関係を国家秩序へ結びましたが、後世の完成した科举制度を漢代へ遡らせません。

4 ユダヤ教とイスラーム — 聖典・共同体・法の比較 【比較】

ユダヤ教 唯一神信仰、律法・聖典、祭祀と学びは、政治的中心を失った後やディアスポラでも共同体の規範を保つ力となりました。会堂・家庭・学習は、領域国家に一致しない共同体を支えました。

イスラームへの橋 7 世紀、クルアーンと預言者ムハンマドの共同体は、信仰・法・政治を結ぶウンマを形成しました。初期拡大ではアラビア語・礼拝・法・統治が広域を結びましたが、後世の制度をすべて創始期へ遡らせず、次分冊の宗教と統治へ接続します。

比較軸	儒学	ユダヤ教	イスラーム
中核媒体	経典・教育・儀礼	律法・聖典・共同体	クルアーン・礼拝・ウンマ
国家との関係	官僚・国家秩序に内在	国家を越えて共同体を維持	共同体・法・政治を結ぶ
再生産	学者・官僚・学校	家庭・会堂・学習	学者・礼拝・法・教育

比較の意味 広域社会を結ぶ方法は、独立教団・信仰共同体だけではありません。国家教育に内在する儒学、領域国家を越えるユダヤ共同体、信仰・法・政治を結ぶウンマは、統合媒体の幅を示します。

六 比較して整理する／七 答案パーツ

比較軸	仏教	キリスト教	儒学
共通規範	解脱・慈悲・戒律	救済・信仰・隣人愛	仁・礼・徳・秩序
担い手	僧尼・在家信者・商人	宣教者・司教・信徒	学者・官僚・教師
制度	サンガ・寺院・僧院	教会・司教区・会議	太学・官僚制・国家儀礼
伝播	交易路・巡礼・翻訳	都市・道路・地中海航路	国家教育・文書行政・文化圏
国家との距離	保護を受けつつ越境	緊張から公認・国教化へ	国家秩序の内部へ制度化
留保	現地化・教派差	成立と国教化を分ける	救済宗教と同一視しない

比較の結論 三つは共通規範を制度・教育・文書で再生産する点では比べられますが、独立教団、信仰共同体、国家官僚秩序という組織形態と国家への距離が異なります。

一文説明（49 字） 仏教はサンガと寺院が教えを継承し、商人・巡礼者・交易路を通じて国家境界を越える信者共同体を広げた。

短い説明（107 字） 仏教は僧団・寄進・交易路によって越境的に広がり、キリスト教は都市教会・書簡・司教制度によって共同体を結んだ。両者とも帝国の交通と保護を利用したが、国家との緊張や現地化を伴い、一様な教えがそのまま移動したのではない。

統合説明（148 字） 仏教とキリスト教は教団・聖典・伝播路によって国家を越える共同体を作り、王や皇帝の保護を受けることで制度化した。儒学は独立教団ではなく、經典教育・官僚養成・国家儀礼を通じて皇帝秩序を倫理化した。精神的統合は内面の信仰だけでなく、担い手と制度が共通規範を再生産し、国家と協力・緊張する仕組みであった。

問題編 教え・担い手・制度を対応させ、伝播路の働きを説明する

ミニ演習

問一 固有名詞を教え・担い手・制度へ結びつける

次の用語について、最も関係の深い思想・宗教を記し、主な役割を語群から一つ選びなさい。

語群 教団／王権保護／都市伝道／教会制度／官僚養成／越境共同体／信仰・法・政治

用語	思想・宗教	主な役割
サンガ		
アショーカ王		
パウロ		
司教		
太学		
ディアスポラ		
ウンマ		

問二 帝国の交通網が教えの伝播を支えた理由を説明する

仏教またはキリスト教に触れ、帝国の道路・都市・交易路が教えの伝播と共同体形成に果たした役割を 80～100 字で説明しなさい。交通だけでなく担い手と制度も書くこと。

組み立ての手がかり 交通網・都市→僧侶・宣教者・商人が移動→経典・書簡・寄進・教団が定着→遠隔地の共通性

問題編 越境的共同体を、担い手・制度・国家との距離で比べる

問三 仏教とキリスト教の広がり比べる

仏教とキリスト教の共通点と相違点を、担い手・制度・伝播路・国家との関係の四軸から 110～130 字で説明しなさい。サンガ・教会の二語を用いること。

比較軸	仏教	キリスト教
担い手		
制度		
伝播路		
国家との関係		
共通点		

比較の順序 教えの内容ではなく、誰が運び、何が定着させ、国家とどの距離を取ったかを同じ位置へそろえる。

問題編 国家を越える共同体型と、国家秩序内在型を比べる

問四 キリスト教と儒学の統合方法の違いを説明する

ローマ帝国のキリスト教と漢の儒学を、共通規範・制度・国家との距離の三軸から 120～140 字で説明しなさい。教会・官僚養成・国家秩序の三語を用い、儒学をキリスト教と同じ宗教型にしないこと。

比較軸	キリスト教	儒学
共通規範		
制度		
国家との距離		
相違の結論		

設問条件 キリスト教は国家を越える教会共同体から公認・国教化へ、儒学は経典教育と官僚制を通じて国家秩序の内部へ、という経路差を書く。

解答編 用語を、担い手・制度・国家との距離へ戻す

九 解答と考え方

問一 解答

用語	思想・宗教	主な役割	理由
サンガ	仏教	教団	規律・教え・学問を継承する。
アショーカ王	仏教	王権保護	教団を保護し、法勅でダルマを示す。
パウロ	キリスト教	都市伝道	都市・書簡を結び非ユダヤ人へ広げる。
司教	キリスト教	教会制度	地域教会を指導し共通教義を保つ。
太学	儒学	官僚養成	経典教育を国家の人材形成へ結ぶ。
ディアスポラ	ユダヤ教	越境共同体	領域国家を越えて聖典と規範を保つ。
ウンマ	イスラーム	信仰・法・政治	信徒共同体を共通規範へ結ぶ。

問二 解答

模範解答（97字） 帝国の道路・都市・交易路は、僧侶や宣教者、商人を遠隔地へ運び、経典・書簡・寄進を共有させた。移動先に僧院や教会が形成されることで、教えは一時的な伝達で終わらず、地域を越える共同体として定着した。

別解例（89字） 仏教では交易路を進む僧侶と商人が経典・寄進を運び、僧院が学問と巡礼の拠点になった。キリスト教でも帝国都市と海路を宣教者が結び、各地の教会と書簡が遠隔地の信徒に共通の規範を与えた。

★自己採点の観点 ①道路・都市・交易路のいずれかを扱ったか。②僧侶・宣教者・商人などの担い手を書いたか。③僧院・教会という定着制度へ因果を進めたか。

使用した具体例の役割 交通網は移動の条件、僧侶・宣教者は担い手、僧院・教会は教えを地域へ定着させる制度です。

解答編 同じ軸で比べ、国家との距離の差を残す

問三 解答

模範解答（118 字） 仏教は僧侶・商人が交易路を進み、サンガと僧院が教えを継承した。キリスト教は宣教者が帝国の都市と海路を結び、教会と司教制度を形成した。両者は国家を越える共同体を作り、王や皇帝の保護を受けたが、キリスト教はローマ帝国で公認・国教化へ進んだ。

別解例（123 字） サンガを中心とする仏教は、寄進・巡礼・交易路によって各地の僧院を結んだ。キリスト教は都市教会、書簡、司教を通じて信徒を結んだ。いずれも帝国交通を利用しつつ現地化した。前者は複数国家を越えて広がり、後者はローマ皇帝との緊張から制度的結合へ移った。

★自己採点の観点 ①指定二語を正しく用いたか。②担い手・制度・伝播路・国家関係をそろえたか。③共通点だけでなく、公認・国教化などの経路差を書いたか。

問四 解答

模範解答（121 字） キリスト教は教会と聖典を通じて国家を越える信仰共同体を作り、後にローマ皇帝の公認・国教化で国家と結合した。儒学は經典教育と官僚養成、儀礼を通じて皇帝の国家秩序を内側から倫理化した。両者は共通規範を制度化したが、国家への距離と組織形態が異なる。

別解例（121 字） ローマのキリスト教は都市教会と司教制度を持ち、国家と緊張しながら公認後に帝国の正統性を支えた。漢の儒学は独立教団ではなく、五經の学問・官僚養成・国家儀礼によって君臣関係と国家秩序を倫理化した。前者は信仰共同体型、後者は官僚教育型の統合である。

★自己採点の観点 ①指定三語を因果の中で用いたか。②教会共同体型と官僚教育型の差を示したか。③両者とも共通規範を制度化したという比較可能性を残したか。

使用した具体例の役割 教会は国家を越える組織、官僚養成は国家秩序内部で理念を再生産する仕組みです。

解答編 帝国と理念の相互作用を、三つの制度化経路へ分ける**問五 解答**

模範解答（184字） 精神的統合原理は教えだけでなく、担い手と制度化によって広域社会を結んだ。仏教はサンガと商人が伝播路を進み、僧院を各地に作り、王の保護も受けた。キリスト教は都市教会を結び、ローマ帝国で公認・国教化されて正統性を支えた。儒学は經典教育と官僚養成を通じ、国家秩序を倫理化した。帝国は交通と保護を与え、教えは共同体と服従理由を作ったが、国家との緊張や地域ごとの現地化も残った。

別解例①（190字） 帝国の道路・都市・交易網は、人と文書が移動する伝播路となった。仏教では僧侶・商人・サンガが国家を越える共同体を育て、アショールカ王などの保護が制度化を助けた。キリスト教は教会と司教制度を広げ、皇帝との緊張を経て国家の正統性にも組み込まれた。儒学は学者・官僚・国家儀礼によって皇帝秩序を内側から支えた。このため精神的統合は一様な信仰ではなく、越境型と国家内在型の異なる仕組みを生んだ。

別解例②（191字） 仏教の僧院、キリスト教の教会、儒学の学校と官僚制は、理念を繰り返し学び実践する制度化の形であった。帝国の伝播路は僧侶・宣教者・經典を運び、王や皇帝の保護は組織を安定させた。一方、形成された共同体は国家境界を越えたり、国家を批判したり、逆に儀礼と教育で正統性を与えたりした。したがって精神的統合は帝国を補完するだけでなく、政治権力と協力・緊張しながら文明圏の共通性を作る過程であった。

別解の役割 ①は越境共同体型と国家内在型を比べ、②は僧院・教会・学校という制度から帝国との協力・緊張を組み立てます。

★自己採点の観点 ①三例すべてを扱ったか。②指定四語を因果に組み込んだか。③帝国の交通・保護と、理念の連帯・正統性を相互作用として書いたか。④成立と制度化の時期差、現地化、国家との緊張を残したか。

使用した具体例の役割 サンガ・教会・官僚養成は、教えが生活と統治へ定着する異なる制度化の証拠です。

十 この講のまとめ・他講との接続

この講の一文まとめ 精神的統合原理は、教え・聖典・教育・教団・官僚・儀礼を通じて共通規範を再生産し、帝国の交通と保護を利用しながら、国家を越える連帯または国家秩序の正統性を形成した。

接続する講	この講から持ち越す問い
第四講 古代帝国	帝国の交通・多民族性・正統性は、教えの伝播と制度化をどう支えたか。
第七講 宗教と統治	宗教権威と政治権力は、保護・任命・法・課税を通じてどう制度的関係を結ぶか。
第八講 交易ネットワーク	商人・僧侶・港市・隊商路は、教え・言語・文書をどのように運ぶか。
第九講 文明圏	宗教・思想・言語・制度が重なると、帝国境界と異なる文明圏はどう形成されるか。

講末の自己確認

- 仏教・キリスト教・儒学を、教義だけでなく担い手・制度・伝播路へ結べる。
- サンガ・教会・官僚養成を、理念を日常へ定着させる異なる制度として比べられる。
- 教えの成立、広域伝播、国家との結合を別の時点として説明できる。
- 帝国が交通・保護を与える面と、理念が共同体・正統性を作る面を相互作用として書ける。
- 儒学を救済宗教と同一視せず、ユダヤ教・イスラームを後代への橋として位置づけられる。

考えを広げる三つの問い

問いの型	発展問い
比較	聖典・翻訳・学校は、それぞれ遠隔地の共通性と地域差をどう同時に生むか。
評価	国家の保護は教団を安定させる一方、教義統一・異端排除・他集団への圧力をどう強め得るか。
長期	古代に成立した教えが中世の文明圏を作るまでに、政治・交易・言語は何を付け加えたか。

発展問い 共通の価値観は人々を結ぶだけでなく、『正しい教え』『正しい秩序』の境界も作ります。統合と排除が同時に生じる条件を、三つの事例から考えよう。

第一分冊まとめ 構造と具体の往復

段階	主な媒体	主な担い手	構造上の意味
農耕	土地・作物・貯蔵	家族・村落・管理者	余剰が統治の条件を広げる
都市	神殿・宮殿・城壁・記録	王・祭司・書記・都市住民	資源集中が制度と正統性を要する
ポリス	市民資格・民会・軍事	限定された男性市民	負担と参加を結ぶが排除も作る
帝国	道路・地方官・税・法	中央・地方有力者・被支配者	征服を反復的な広域統治へ変える
精神的統合	教え・聖典・教育・教団	僧侶・宣教者・官僚・信徒	国家内外に共通規範と連帯を作る

分冊の一文まとめ 古代社会の統合は、生産と余剰を管理する局地的な仕組みから、都市・市民共同体・帝国へ空間を広げ、さらに教えと制度によって国家を越える文明圏の基礎を作った。ただし、各段階は前段階を消さず、地域ごとに異なる組合せを取った。

次の分冊へ持ち越す三つの問い

- 帝国の統一が弱まった後、土地・軍事・保護はどのように地域的な分権へ組み替えられるか。
 - 教えが国家制度と結びつくとき、宗教権威と政治権力は協力・競合・分担をどう変えるか。
 - 帝国・宗教圏を越える交易路は、誰を担い手として異なる文明圏を結ぶか。
- 発展問い** 古代に生まれた統合装置のうち、現代の国家・都市・市民権・教育・宗教共同体にも形を変えて残るものは何か。共通点だけでなく、成員資格と排除の違いまで比べよう。